日本ウィニコット協会　Newsletter

Vol.1 2019

目次

会長挨拶……1
巻頭言
　ウィニコットを使用するのか？あるいは発見するのか？
　～日本ウィニコット協会のための講義～（パトリック・ケースメント）……3
特集……15
　ウィニコット・フォーラムの思い出（川谷 大治）……15
　日本ウィニコット協会の設立について（増尾 徳行）……18
論考……21
　ウィニコットとタスティン～心の自閉のポケット～（山崎 篤）……21
　大人になったピグル（加茂 聡子）……30
　カーン問題からウィニコットを救い出す（妙木 浩之）……40
書籍紹介「ウィニコットとの対話」（妙木 浩之）……52
ウィニコット・フォーラム 2019「今、あらためてウィニコットを知る」……54
ウィニコット・フォーラム 2019　抄録……56
　シンポジウム：ウィニコットの臨床と夢（吉村 聡）……56
　シンポジウム：ウィニコットの失敗論について（恒吉 徹三）……57
　シンポジウム：テディベアは，移行対象ではない。（増尾 徳行）……58
　基調講演：治療的退行論再考（北山 修）……59
　事例検討：ウィニコットの症例「抱えることと解釈」を検討する（館 直彦）……60
協会からのお知らせ……61

会長挨拶

日本ウィニコット協会について

日本ウィニコット協会 会長　館 直彦

日本ウィニコット協会は，ウィニコットの理論および臨床に関心を持つ日本の臨床家が母体となってこの度創設された学術団体です。今日，精神分析家ウィニコットの評価は益々高まっているといって良いでしょう。フロイト以降の偉大な精神分析家たち，フェレンツィ，クライン，ラカン，ビオンらと並べても，ウィニコットは，その臨床と理論の独創性において，他の追随を許さないように思います。

彼の理論は，母子関係の理論，移行対象と移行現象，遊ぶことと創造性，対象の使用，あるいは解離と本当/偽りの自己の理論などが特に有名ですが，彼の守備範囲は精神分析と児童精神医学に留まらず，人間の本性の領域全般に及ぶ広範な理論を展開していることで知られています。つまり，精神病理学的なことに限定されるのでなく，人間が人間らしく生き生きと出来るのは何故なのかを問うのが彼の理論です。また，環境の役割を重視するのも彼の理論の特徴ですが，それは必然的に関係性を重視することにもつながります。それを端的にあらわしたのが，「一人の赤ん坊などというものはいない」という有名な言葉なのですが，これは当たり前のことを言っているようでいながら，私たちの生きることの本質をついているので，強い印象を与えます。

一方，ウィニコットは大胆な，しばしば実験的な臨床実践を行ったことで知られています。彼は見立てを重視し，必要であればマネージメントを行いましたが，患者の自然な成長や自発性を重視し，治療者は得てして余計なお節介をして患者の成長を削ぐ恐れがあるので，可能な限り何もしないことが重要であると唱えています。アセスメントはそのための作業であるとも，彼は考えていますが，そこから治療相談面接や，On Demand 法，長時間セッションなどといった技法が生まれてくることになります。舌圧子ゲームやスクィグル・ゲームは，治療者と患者の相互関係を重視した治療ですが，遊ぶことの理論を実地に適用したものと見ることが出来るでしょう。彼の実践について知れば知るほど，彼が規格外というのではなく，真に独創的だったということが分かります。しかも，そうした彼の臨床の背景には，患者に対する深い愛が潜んでいます。そこがもっとも治療的なところなのでしょう。

さらに特筆すべきことは，彼の理論が単に精神分析の理論に留まらず，文化や芸術もその射程に含めたものである，ということです。彼の創造性の理論は，移行対象や移行現象の考えを踏まえたものですが，本来私たちが持っている創造性が，関係性を媒介として展開するというものであり，フロイトやクラインの理論に比べて，はるかに腑に落ちるもの

です。実際のところ，私たちは，その著作を通してしか，ウィニコットと触れることは出来ないのですが，彼の文章を読むたびに，彼との対話に巻き込まれていき，その中で新たな発見を繰り返します。それは彼自身が，第一に対話することを心掛けているからだと思いますが，創造性が展開するのは対話を通してであることを良く分かっているからでもあるでしょう。

ウィニコットは弟子を作らず，学派を構成することはありませんでした。それ故，私たちは誰一人としてウィニコッティアンではありません。しかし，私たちは，彼の精神を継承し，それを臨床のみならず，文化的・芸術的な領域も含めたその他の実践に活かしていきたいと思って，日本ウィニコット協会を設立しました。日本ウィニコット協会は，精神分析と児童精神医学の臨床に留まらず，社会的・文化的・芸術的な領域を含めて幅広く活動していきたいと考えています。私たちの考えにご賛同の皆さんに，この協会のメンバーになっていただけたら，と思います。

巻頭言

ウィニコットを使用するのか？あるいは発見するのか？
～日本ウィニコット協会のための講義～

パトリック・ケースメント
（根本裕幸・妙木浩之訳）

この度は日本ウィニコット協会の名誉顧問に任命して頂いたことに感謝申し上げます。そして，あなた方に直接この講義をすることが出来なくて申し訳なく思います。

ウィニコットがあなた方のような協会で自分の仕事が歓迎され続けていることを知ったら，とても喜ぶでしょう。しかしここにはおもしろい皮肉もあります。

同僚との議論の中で明言していたのですが，ウィニコットは精神分析において自分が新しい運動を起こしたいのではありませんでした。彼は「弟子」も欲しがりませんでしたし，それゆえ人々を「ウィニコッティアン」にさせたくもありませんでした。それよりはむしろ，彼が見てきたところを人々に見てもらうことが彼の望みでした。つまり，彼が見ていたもののいくらかを，人々が自身で見ることです。

したがって私はこの講義の題名にもあるように，ウィニコットのアイデアを当てはめようとして使用することと，それらを私たちの臨床的な仕事の中で発見することとの違いを示してみたいと思いました。彼のアイデアと共鳴する実例を発見することによってこそ，私たちはウィニコットの記述してきたことを最も直接的に理解することができるのです。そしてウィニコットを発見するその瞬間において，彼のアイデアが私たちにとって最も鮮明に生き生きとするのです。したがって私の講義では，彼のアイデアが私たちの中で生き生きとするような実例をたくさん含めています。

この講義の一部は，私が 1989 年に行ったものに基づいています。その講義はウィニコットの死後に出版された『人間の本性』(1988)[1]を私が批評した[2]すぐ後に行ったものでした。彼のその本は 2004 年にあなた方の代表である館直彦先生により日本語に翻訳されたと私は聞いています。

ウィニコットの著作にはある奇妙な事実が存在します。それは，著作において彼はときに簡潔で才能に溢れているかと思えば，別の箇所では理解するのがいささか難しいこともあるということです。いささかわかりにくいものであるようにさえ思えます。しかしそれらの

---

[1] Winnicott, D.W. (1988). *Human Nature*, London: Free Association Books. New York: Pantheon Books.(牛島定信監訳,館直彦訳(2004).人間の本性.誠信書房)

[2] Casement, P.J. (1989). *International Journal of Psycho-Analysis.* **70**:360-362.

わかりにくい文章の中にさえ，私たちが臨床の中で彼の述べていることに関係する何かに出会うとき，そこには見覚えのある感覚があり，そして彼が記述しようと試みた理論が生き生きとし始めるのです。

それゆえ今回の私の目的は，ウィニコットのアイデアや彼のいくつかの概念と私が遊んできた経験を分かち合うことです。その遊ぶことの中で，彼のアイデアに沿う臨床例を挙げながら，私が彼の述べていることを理解しようとする試みを描き出して，それらが私自身や，願わくば，あなた方にとっても生き生きとしたものになればと思います。

私はまず彼の著書『人間の本性』において，ウィニコットが簡潔であったことの例を挙げることから始めようと思います。それはほぼすべてが，ソーシャルワーカーや教師に向けた講義のために作った原稿に基づいています。その本文は，彼が残したままのものです。彼はそれをさらに書き足そうと計画していたようですが，生前には完成させることができませんでした。

ウィニコットが彼自身のために書いたたくさんの記述の中の一つをここに引用してみます。

> 男根期には，男の子は完全であるが，性器期には，完全であるためには，女性に頼らなければならない。(邦書 p.47)

このうえなく簡潔であり，かつ考えてみる価値のある記述です。彼がそこで述べていることの中には意味深いものがあります。

しかし彼の概念の中には依然としていささかわかりにくいものもあります。私は彼がそれを意図的にわかりにくくしたとは考えていません。無意識的に彼が意図していたのは（私が理解している限りですが），私たちをその概念に取り組ませることだったのではないかと私は考えます。そしてそれに取り組む中で，彼の述べていることに対する自分自身の理解へと到達することが出来るのです。

幸い，他者に向けての原稿は，ウィニコットが自身のために書いた記録ほど，わかりにくいものではありませんでした。

彼がパディントン・グリーン病院で働いていた頃のエピソードからそれを説明してみます。これから述べるのは実話であり，当時彼と一緒に働いていた人が私に教えてくれた話です。

ウィニコットは，ここではデイビットと呼ぶある一人の男の子とその母親に会い，次回の予約をしました。しかし次に母親がデイビットを連れて来院したとき，ウィニコットは病気で休みだったために，代わりに他の医師が会うことになりました。そして研修医が，ウィニコットの役を担うことになったのです。なんと難しいことでしょうか。

この研修医は当然ケース記録を頼りにして，前のコンサルテーションのあとウィニコットが何を書いたかを見ました。そこに彼はウィニコットが次のように書いているのを見つけたのです。「デイビットを連れた某夫人に会った。母親は紫色のズボンを履いていた」…

これだけでした。彼が書いたのはこれだけです！明らかにこれは，ただ一つの細部によってそのコンサルテーションの全体を思い出すという彼流のやり方だったのです。

次にウィニコットが彼自身をとても広範囲に応用していたことのいくつかを見ていきたいと思います。

私はここで完全なリストを提示することはできませんが，次に挙げるのは彼が講演していたグループの一部です。また彼が論文を発表した人々の範囲たるや，まったく驚くべきものでした。彼が語りかけたのは精神分析家や心理療法家，精神科医，小児科医の同僚たちだけではありません。ソーシャルワーカーや看護師，教師，介護士，問題を抱える子どもたちと仕事をする人々，刑務所の管理者，治安判事にも彼は語りかけたのです。他にもあなた方が名前を挙げうる人々に向けて，きっと論文を書いていることでしょう。

死後に出版された彼の論文集の中には数学教師に向けて書かれたものがあり，その題名を「総和 Sum」としています（ラテン語で Sum は「私は存在する」の意味）。あるいは数学における「足し算」と言う人もいるかもしれません。この論文によって彼は「統合」というアイデアを教師に紹介しました。

これはウィニコットが彼自身のアイデアと遊び，また他の人々を遊ぶことへと誘う例です。これこそ今回私がしたいと思っている，あなた方を遊ぶことへと誘うということです。

ウィニコットのアイデアをさらに見ていきましょう。そしてそれらのアイデアが私たちの思考へと入ってきたとき，その重要な使い方を発見することができるでしょう。

たとえば著書『人間の本性』において，ウィニコットは体内化と統合の違いを明確にしようと試みています。分析家もよい乳房と悪い乳房に関して話すことを好むので，ウィニコットはこう言います。「よい乳房」が体内化されると，結果として「内側にあるよい感覚が，全般的・非特定的に増大します。体内化は消化の過程として理解されます。それを自分のものにするのです」と。

ウィニコットは次に体内化と，消化の過程を欠いている取り入れとを比較しています。取り入れの結果，取り入れられ，「それとわかる」よい乳房は，以前の理想化に証拠を与えるものと見なされます。そして，引用しますが「その取り入れは魔術的であり，本能的な経験の部分ではない」。

ウィニコットはここに教師にとっての重要な点があると言っています。再度引用してみます。

> ここで，教師の仕事が最もうまくいった場合には，教師は生徒に認識されない，という重要な諌めがある。なぜならば，そのときには生徒は，教師の授業を，取り入れて，そのうえで成長していると言えるからである（邦書 p.86）

この短い例を見ていきましょう。

ある時私は，英国のある有名な美術学校に素晴らしい評判を受けている教師がいることを知りました。彼の教え子たちのほとんどは，彼らの美術作品において最も高い評価を得て

いくのでした。しかし試験官が新しくなったある年には，その教え子たちの作品のほとんどは低く評価されてしまいました。この評価の変化は多くの抗議を巻き起こし，その新しい試験官を調査する運びとなりました。なぜ彼は前年までは常に高い評価を得ていた彼らの作品に低い評価をつけたのでしょうか？

調査してわかったことは，その教え子たちは魅力的な作品を作ってはいたけれども，彼らの作品のスタイルは皆ほとんどすべて同じものでした。ウィニコットの言葉でいえば，そこには理想化された教師とそのスタイルの取り入れがあり，教え子たちはほぼ真似することによってそれを身に付けていたのです。彼らは個人的な創造性の発現を可能にする内的な過程を経ることがなく，自分自身のスタイルを発展させていなかったのです。

これらはウィニコットが付け加えた実に重要な点ですが，ほとんど投げ出した考えです。これは，しばしば彼が話すことを投げ出すことで教えているという，ウィニコットにはとても典型的なことなのです。

ここで再び『人間の本性』から別の価値ある一節を引用してみたいと思います。

> 人びとは，どのようにすれば自分たちを迫害する世界が手に入るかを徐々に学ぶようになり，妄想の狂気に陥ることなく，内的な迫害から安心を得るようになる（邦書 p.97）

ある短いエピソードを述べてみます。

ずいぶん昔のことですが，私はときおり精神病的となってしまうある境界精神病患者を担当していました。彼女がときに「自身を迫害するよう世界を築き上げ」ているのを，彼女がわかるよう助ける方法を簡単には見出せない，ということに，私は気づきました。そこである日私は心の中でこの問題とただ遊びながら，彼女が自分のしていることを理解できるよう援助しようとして，次のように言っている自分に気づきました。「あなたはバスに並ぶ人の列に向かって叫ぶようなことをしていますね。これは謎かけですが，その意味を説明してみましょう」。そして今回はあなた方にも説明しましょう。

> 「もし私がバスに並ぶ人の列を通り過ぎるときに，互いに話をしている人たちが私のことを話しているに違いないと感じたら，私は怒って彼らにこう叫びたくなるでしょう，『私について話すのをやめろ』。すると私が叫ぶ前に彼らが私について話していたとしてもそうでなくても，私が再びその列を通り過ぎるとしたら，今では彼らの中に私について話している人がいるのをきっと発見するでしょう。」彼女は私の言ったことの意味を理解してくれました。

この奇妙な私の言葉はあとになってこの患者にとって実に役立つ表現となりました。彼女が私と会わなくなっておよそ 10 年が過ぎても，彼女はときどき電話をしてきて，自分がバスに並ぶ人の列に再び叫び始めたことを話してきました。彼女は空想から現実を区別するために私の助けを必要としていました。彼女はそれを止めるためにはただ私の声を聞く

ことを必要としているのだとも言っていました。

これが，ある人々は自分を迫害する世界を築き上げるというウィニコットのアイデアと遊ぶことの例です。

これとは別の区別について考えてみたいと思います。彼がつけたその区別は，分析家や心理療法家ばかりでなく，ソーシャルワーカーや両親，世話をする人たちにとっても重要です。それは，自我ニードとイドニードの区別です。

イドニードは満足を追求します。しかし通常それらのニードは子どもや成人の年齢や成熟度に応じて，ある程度のフラストレーションに耐えられるようになります。一方で私たちは，常に自我ニードを扱っているはずです。それは理解してもらうことや適切に応答してもらうこと，そして真剣に向き合ってもらうことのニードです。自我ニードは決して適切に阻止することができないものであると私たちは考えるべきだと思います。

ウィニコットはあるところで「私は自我ニードに関してはこの患者に失敗してはならない」と述べています。しかし，彼はこう続けています。「しかし彼女は最終的に，しばしば彼女の生活史によって決定されたやり方で私に失敗させるだろう。そして彼女は私の失敗のやり方を，他の人々が彼女に対して失敗したやり方を表すものとして使うだろう」。そうすることで彼女は他の人々が以前彼女に対して失敗したその関係性にもともとは属していた感情の中へと入っていくことが可能になるのです。

現在私たちがこの違いを臨床的に応用しようとするなら，必要とすること needing と欲求すること wanting の間の違いを考えると役に立つことに，私はいつも気づきます。

この違いはとりわけ家庭生活において重要となります。子どもは誕生してからほとんど即座に面倒を見てもらう必要があります。しかし後になって，成長していく子どもは自身が管理できる程度の欲求不満に耐える能力を発達させ始めることができます。

これと関連してウィニコットが強調しているのは，母親の最も難しい仕事の一つは，彼女が子どもに対して自身の「適応を徐々に失敗していくこと」であるということです。言い換えれば，子どもに即座に降参してしまわないことです。子どもたちは年を重ねるにつれ，自身が管理できる程度の欲求不満に耐える能力を発達させる必要があるのです。ここでは，「ノー」と言うことが重要になります。

しかし子どもがそのときすることに，耐えられない母親がいます。とりわけ，母親が「ノー」というのがふさわしいときです。母親は「ノー」というのが嫌ですし，多くの母親は自分がいい母親と感じたい。すると子どもは欲求不満から，母親の気分を悪くさせようとふるまうことが，よくあります。この点こそ，子どもが彼女を悪い母親であると感じさせる狙いなのです。しかし母親が学ばねばならないのは，つぎのことです。子どもに適切な制限を設けようとすると，自分たちが悪者かのように扱われること，そしてそれをどう生き残るかです。それは，自分が求めているものを手に入れようとしてかんしゃくを用いることを知った子の場合には，特にそうです。

昔，ソーシャルワークで A 婦人というクライエントを担当していたとき，私はこの点に関連するたくさんのことを学ぶことができました。私が彼女のことを依頼されたのは，彼女

は家賃を払わないことでよく立ち退かされそうになっており，もしそうなった場合は子どもたちが保護されるという事態になってしまうので，それを回避するためでした。

A 婦人を担当するにあたり，私は慈善事業から補助金をもらってきて，彼女のすべての借金を彼女が毎週の支払いによって返済可能な額にまで減らしてやりました。しかし私は，この当座の援助は繰り返しては受けられないことを，はっきりさせました。はじめのときのように，彼女への補助金を上げることは，これ以上できないでしょう。

彼女との作業からわかってきたことは，彼女の借金のほとんどはクリスマスの時期に発生していたことです。そこで彼女はお金の余裕がない場合でも子どもたちに高価なプレゼントを買ってやることで自身の愛情を常に示していたかったのです。そしてその年の残りにはクリスマスの借金を返済しなければならなくなっていました。

ある年の夏に，A 婦人は明らかに買う余裕のないような非常に高価な品物をどうしても買おうとしていました。それゆえ私はこの件に対する自分の立場を非常に明確にしました。私は彼女に次のように伝えました。「私はあなたの代わりにその判断を下す立場にはいません。新しい借金を作るのかどうかはあなたが自分のために判断しなくてはいけませんし，その借金に対処する方法を見つける責任は完全にあなたにあるのです。私は以前のように借金から抜け出すような安易な方法はないということをすでにはっきり伝えていましたね。」

私が次に A 婦人のもとを訪れたとき，彼女は自分の欲しかった（しかし必要のない）ものを買ってさらなる借金を背負ったことを知りました。そして彼女は私がこの新しい借金から彼女を救い出さなくてはいけないかのように直ちに要求してきました。もし私がそうしなければ，彼女は立ち退かされてしまうのです。

私は明らかに試されていました。私は以前彼女に対して言ったこと，このさらなる借金を解決する責任は今では彼女にあることを繰り返し伝えました。私がこの状況から抜け出させる安易な方法として，追加の慈善補助金を申し込むことを正当化することは絶対にできないのです。

彼女は私が以前言ったことを断固として変えないでいることを知って激怒しました。あまりに怒っていたので，実際，彼女は私に物を投げつけてきました。いくつもの靴や，手当たり次第，持てるものは何でも投げてきました。実際に私には当てませんでしたが，彼女の激怒は収まりませんでした。それでも私は断固として自分の考えを変えませんでした。

彼女のもとを去る前に，彼女は物を投げてきたけれども私はこれまでと同じように毎週彼女のもとを訪ね続けるつもりであることを伝えました。これに彼女は，かなり驚きました。というのは，彼女は私が背を向け，おそらくは永遠に彼女のもとから離れていくだろうと思っていたからです。

6 ヶ月ほど後，私たちはクリスマスの時期にさしかかりましたが，A 婦人は私に対してとても誇らしげに，現在自分には全く借金がないということを話してきたのです。

これはどのようにして起こったのでしょうか？彼女は今回のクリスマスのことを話してくれました。彼女は 5 人の子どもたちに対し，今回は大きなプレゼントを買うつもりのないことをはっきりと伝えました。彼女も買う余裕がないことをちゃんとわかっていたので

す。子どもたちは皆，単なる「しるし」のようなプレゼントで「間に合わせる」しかなく，それは子どもたちにとっては非常に困難なことでした。実際子どもたちはそのことで彼女にひどい時間を味わわせましたが，しかし彼女は断固として決意を変えませんでした。

私の最新の著書から引用してみます。

> A 婦人は私が断固として決意を変えなかったことから何か重要なことを学んだのだと思いました。私は彼女に対して「ノー」と言いましたが，しかし毎週彼女のもとを訪れ続けました。彼女はこれを，私が彼女の怒りを十分に受け止めており，かつ彼女がこの事態に自分で対処することができるという信念を変えないためなのだと気づいたのです。子どもたちが彼女に対しお菓子やプレゼントを求めてきた時に，彼女は子どもたちに対し，私がしたのと同じように「ノー」と言うことができるようになりました。これこそ彼女が新しい借金を完済した方法であり，よい気分を感じるために以前のように物を買い与えてしまうことによって子どもたちにお金を使ってしまうことはありませんでした。彼女は子どもたちに対するより強い種類の愛情も見出しました。その愛情は，子どもたちを甘やかしてしまわずに，よい親であろうと本当に努めている場合には憎まれることに耐えることができるのです。

私は後にこの経験をソーシャルワークの領域での私の最初の出版物の中で『限界を設けること：成長への信念』[3]として書き上げました。このタイトルにすべてが表現されています。そしてこれらすべては，私がここで述べてきたような必要とすることを，欲求することと対比させて論じているウィニコットの著書を読むことから発展してきたものです。

次に私は別のウィニコットの概念に移ろうと思いますが，これは（英国においては）なぜだかほとんど知られていないものです。それは反社会的傾向という概念です。これをあなた方に知っていてほしいと思います。

ウィニコットは反社会的傾向を「診断ではない」と述べていますが，しかし一種の非行予備軍の行動として彼は二つの形式を示しています。それは盗むことを通して表現されるものと破壊性を通して表現されるものです。

盗むことについて，ウィニコットが述べているのは，子どもが自身の成長にとって必要不可欠なものを奪われており，かつ，それがあまりに長期にわたっている場合，その子どもは，「希望があるなら，盗みを通して，象徴的に」それを探し求めるということです。この最後の部分は全くウィニコットらしい部分であり，行動を通して表現される無意識の希望を認識するということです。

例を挙げてみます。

昔，私は警察官と結婚したある患者と会っていました。彼らには 2 人の息子と 1 人の娘

---

[3] Patrick Casement (1969). "The setting of limits: a belief in growth", *Case Conference*, Vol 16, 7: 267-71.

の 3 人の子供がいて，その娘が末っ子でした。

この娘が 10 歳頃のある日，彼女はいくつかの店で物を盗んだということで逮捕され，パトカーに乗せられて家に連れてこられました。父親は家に呼び戻され，私は患者（母親）から聞いたのですが，父親はすぐさま娘に向かってこう言ったのです。「この家には泥棒の居場所なんてないからな。」

私はこの話にとてもショックを受けました。そしてこの家庭について私がこれまで聞いたことを熟考してみるよう促されました。私にとって印象的だったことは，父親は息子たちには献身的で，一緒にフットボールやクリケットをしてきたと何度も聞いたことがあるのに対し，彼が娘とともに時間を過ごしたという話を全く聞いたことがなかったということです。

このことを思い巡らせながら，私は患者に，これは非行予備軍の盗みであると説明されるものの例かもしれず，そこで子どもはしばしば何か欠けているものを指し示しているのだと伝えました。ウィニコットが書いていたのは，子どもは欠けているものを，希望があるなら，盗みを通して，象徴的に探し求めるということです。私が考えるに，この娘に欠けてきたであろうものは，息子たちに対してだけではなく，娘に対しても父親として接することのできる父親の存在です。その代わりに，この娘が盗みを通して最初に見つけたものは，自分に対してすぐさま警察官となってしまう父親でした。それは父親として接してくれる父親ではありませんでした。

それゆえ私は患者に，この無意識的な探索，つまりただの警察官はなく娘の父親ともなりうる人を探している，と夫に説明するとよいかもしれない，と示唆しました。

私が後に知ったのは，この父親は，娘の盗みの中には彼へのコミュニケーションがあったかもしれないことを聞いてとても安心したということです。そして彼は父親として娘と過ごす時間を必ずもつように努力しました。この子どもは盗みを通して無意識的に探していたものを実際に見つけることができました。そして彼女は二度と盗みを繰り返すことはなかったのです。

破壊性についてウィニコットは，そこにあるのは，かつて失われた環境からの供給を探し求めることだ，と述べています。ある人間的な態度があり，それが信頼できるものであるからこそ，個人は活動し，行動し，興奮する自由をもつことができるのです。

私が保護監察官だった時代の話から，この例を挙げてみましょう。

私はある男の子の法廷報告を依頼されました。彼は他の子と共に，エンジンキーが差し込まれたままのたくさんの高価な新車が並んでいる自動車販売店に侵入し，そこで車に対する莫大な損害を与えました。この男の子たちはその駐車場内で車を乗り回し，楽しみを得るためだけに他の車にぶつけていきました。その損害はすさまじいものとなってしまいました。

私がその家庭を訪ねて彼の両親に会ったとき，彼らは物静かで親切な人物であるように私には思えて，その両親には攻撃的な徴候は何も見出せませんでした。彼らの息子があれほどの強い攻撃性を突然行動化するとは，一体どういうことなのでしょうか？私はもっとよ

く調べる必要があると思いました。

彼らの家を出るとき，父親は私に一つ頼みごとをしてきました。彼は息子の行動が攻撃的で，暴力的でさえあったために，自身が陸軍時代から所有していたグルカナイフを家の中に持っておくことに落ち着かなくなっていたのでした。彼はそれを家の中に置いておくのは安全ではないように感じました。

これを考えてみると，彼の息子は無意識的に父親を刺激して，自分の攻撃性に関わってもらい，安全なコンテインメントを供給してもらおうとしていたのではないかと私には思えました。それは，父親が自身の攻撃性を否認したと思えるところから，失われていたものです。その攻撃性は今や，彼が殺しに用いたナイフに表象されていました。そのナイフは，今ではすっかり昔のこととなった父親のかつての軍人生活を表すものとして家に飾られていました。

その後，父親は息子に対してより関わることができるようになり，息子とともにより精力的に身体的活動に取り組むようになりました。私はつぎのように考えるのを気に入っています。この少年は攻撃的なふるまいを通じて，自身の攻撃性に，よりふさわしいかかわりとコンテインメントを求めていたのであり，そうして無意識に探し求めていたものを発見したのかもしれない，と。

ウィニコットの概念とさらに遊んでいきましょう。

環境としての母親という概念があります。それによって彼が言おうとしていたことは，成長と発達に向けて子どものニードを満たすためにそこにいる母親のことです。

そこから，環境としての分析家あるいは環境としてのソーシャルワーカーという考えへと進んでみましょう。

私たちのもとを訪れる人に対して私たちが提供しているものとは一体何なのでしょうか？確かに，その人の人生を変えるとされている，いわゆる知恵の「宝石」である解釈だけではありません。そこには他にも何かがあります。それゆえ私は，患者と共にいる私たちのあり方にもっと自覚的になる必要があると考えます。

患者は，ある種の変化を引き起こすことがありうる暗黙の，しばしば気付くこともないような方法によって影響を受けていることがあるのです。

例えば患者は，私たちが信頼できるのかどうかや，彼らの出すヒントに対して応答してくれているのか，必要なときに断固とした態度をとってくれているか，そして私たちがそれらの間のバランスをとれているのかに対し，しばしば非常に敏感になっています。

また，患者の視点に対して私が鋭い感受性をもつこと，あるいはそれが欠けていることに患者は影響されています。だから私は，患者との試みの同一化という概念を発達させました。面接室外での患者の経験だけではなく，とりわけ患者が私たちをどのように経験するか，私たち分析家や心理療法家がどのように患者と一緒にいるかを考えるためです。

私は患者の身になると，患者から私がどう経験されていたのかに気付いて，ときどきショックを受けることがあります。しかし，私たちはただ患者の身になっているのではないことを，私は明確にする必要があります。私たちはある特定の患者が，その患者の生活史と感性

でもって，私たちが彼らと共にいるそのあり方をどのように経験しそうなのかに対する感受性を発達させる必要があるのです。

私はある患者に対して，私に母親になってほしいのだろうと思う，と伝えたことがあります。彼女はその考えに対しひどくショックを受け，怯えさえしたのです。その後，私は彼女にとって「母親」とは何を意味するのかを学ばなければなりませんでした。

私たちが「母親的世話」と考えるようなものを求めて，彼女が母親へ目を向けるたびにいつも自分は罰せられる，ということを彼女は発見していました。彼女は母親を，彼女のどんな要求にも，彼女の必要とするどんなことにも耐えることのできない人として経験しました。実際この母親は，職場の薬局から精神安定剤を持ち出して，娘のいかなる要求をも抑え込むために使っていたのです。この子どものニードは母親には手に負えないものとして経験され，それらはすぐさま患者自身に対しても手に負えないものとして経験されたのです。

この患者は明らかに，自身の困難な感情に対処する唯一の方法として，それらを抑え込むことを学んだのです。そして 15 歳になるまでに彼女は薬物中毒者となってしまいました。分析の中で彼女が必要としていたのは，彼女のニードに対して崩壊や報復することなく関わることの出来る人を見出すことでした。これらもまた役に立つウィニコットの言葉です。

ウィニコットによる別の概念に移りたいと思います。私はこれが彼の考えの基礎をなしていると信じているのですが，著作の中にそれを見つけ出すことはできていません。それは私が養育の三人組と呼ぶようになった概念です。

ウィニコットがしばしば強調していたのは，母親，とりわけ初めて子を持つ母親は，赤ん坊に対する母親として支えられる必要があるということです。しかしこの支えは，赤ん坊に対する「ほどよい母親」となる能力を彼女が持っていると信じている人から受ける必要があるのです。

この「三人組」は，赤ん坊を支える母親を誰かが「支える」というものです。しかし母親を支える人はときに，「そんな風にしてはだめよ，こうやりなさい」と言ってしまうことで，とても容易に「よりよい母親」になってしまうことがあります。そしてこの「よりよい母親」は苦痛を感じている子どもをより上手くなだめることができ，あたかもそれは助けになったかのように見えるかもしれません。しかしこれは母親をひそかに傷つけていることもあるのです。とりわけその子どもが祖母や隣人，訪問看護師あるいは父親によってより上手くなだめられる場合にはそうなのです。しかしなだめられた子どもは，彼女より上手になだめる人がいることで，自分の赤ん坊の母親として自信のない母親の腕に抱かれたとき，再び泣き叫ぶかもしれないのです。

この状況はときに危険な程度にまでエスカレートすることがあります。母親がなだめられない子どもの話を聞くと，私たちは誰がこの母親を支えているのかを考える必要があるのです。また，その支えの質はどんなものでしょうか？その支えは母親が赤ん坊に対する母親としてより自信をもてるように助けているものでしょうか？それとも母親として傷つけられたと感じてしまうかもしれないものでしょうか？そのとき赤ん坊は，その母親を攻撃していると経験するかもしれません。母親がすでに，「よりよい」養育，つまり彼女がまだ

赤ん坊に与えることができていないと感じるものを提供できる誰か他の人によって攻撃されていると感じているためです。

ウィニコットによる 2 つの別の重要な概念があります。

破綻恐怖と凍結された外傷です。

ウィニコットは 1974 年に出版された『破綻恐怖』という非常に重要な論文を書いています。

この非常に短い論文の中で，患者の中には破綻することの恐怖を抱き続ける者がいると彼は述べています。分析家が認識する必要のあることは，恐れられている破綻とはすでに起こったかもしれないということです。しかしその破綻は，子どもがそれを取り扱う能力をまだ発展させていなかったときに起こったことかもしれません。過去に起こった外傷は，これからまもなく起こるかのように感じられることがあるのです。そうして患者は適切にコンテインされ，抱えられる必要があります。その一方で，すでに起きていながら十全には経験されていない外傷に取り組みだすのです。ウィニコットにはこの最も洞察に溢れる概念に加えて，外傷が十分に取り組まれていない場合には，その外傷の細部は凍結されることになるという気付きもありました。

今では凍結されている外傷は，心がより成熟し，より適切なホールディングが得られるときまで，心の奥底において異質な身体のように存在しています。それらが得られたとき患者は（いまだ十分には体験されていない）外傷とその細部を解凍させることが可能になり始め，分析によって抱えられる中で今では取り扱えるようになり始めた経験としてそれに取り組んでいくのです。この新しいホールディングを受けて患者は，その早期の破綻に対しより十全に取り組む過程に入ることが可能になり，それをより生き残ることのできる方向へと向かっていけるのです。

いまだ十分には取り組まれてない外傷をそうして解凍するのに，患者は分析家を用いて，外傷の要素や，元の外傷にあって患者を適切に見ることができなかった重要人物を，分析家が表すものとする必要があるかもしれません。ゆえに分析家は「使用される」ことになり，患者の経験の最悪なものに取り組む能力があるかどうかを試されます。分析家は早期の外傷を扱ったり扱い損ねたりすることの局面を表すものとして，とりわけそれらすべての中の「最悪なもの」として体験されたものを表すために使用されるのです。

この試練を乗り切るための鍵は，分析家が生き残る能力を見出すことにあります。したがって私たちは，臨床的につぎのことを発見します。分析的な「よい対象」とは，患者の心の中にある悪い対象よりはましに見えるものではなく，かつて悪い対象を表していたものを生き残ったもの，つまり（ウィニコットがしばしば言うように）破壊や報復なく生き残ったものなのです。

私はこの講義において，私たちはどれほど多くをウィニコットに負っているのか，それを探し求めることはなくとも，私たちの臨床的な仕事においてどれほど多くの彼のアイデアと出会い続けているのかということを，要点を挙げて説明しようと試みました。

ウィニコットは，決して当てはめられるものではなく，私たちが患者とかかわる中で頻繁

に見いだせるものなのです。これはすべて彼の天賦の才がなせるわざです。私たちは彼にとても多くを負っているのです。

特集

ウィニコット・フォーラムの思い出

川谷医院　川谷 大治

ウィニコット・フォーラムの第 1 回の開催日は，当時の抄録集を見ると，1999 年 12 月 11 日(土)です。てっきり日曜日だったと思っていたのに，土曜日開催だったのですね。とんだ記憶違いです。正確に回想できるかどうか自信がありません。また，記憶は酷いトラウマでない限り書き換えられる運命にありますし，この「思い出」は事実からかけ離れたものになりそうな気がします。

そういうわけで，この雑文を記憶に頼ることはやめようと判断しました。雑文だから，曖昧なまま記憶を辿ってみてはどうか，とも思ったのですが，それだと作り話になるので，ここは事実をもとに振り返ろうと思い自宅と医院の資料をかき集めることにしました。2 日間ほどかかったので，さながら年末の大掃除の再現でした。それでも，福岡で開催された第 7 回の抄録集の 1 冊がどうしても見つかりません。言い訳になるのですが，大掛かりな増改築の際に紛失したものとあきらめるしか仕方ありません。

栄えある“第 1 回ウィニコット・フォーラム”

第 1 回ウィニコット・フォーラムは 1999 年 12 月 11 日(土)の午後 1 時から福岡市の「博多座・西銀再開発ビル 11 階会議室」にて開催されました。当時は薬品会社と医療関係者はユルユルの関係で，会場は藤沢薬品工業株式会社の収容 100 人の会議室をお借りして，参加者には大塚製薬からオロナミン C，飲むカロリーメイトだったかな，が無料で提供されたのを覚えています。

記念講演は牛島定信先生にお願いしました。タイトルは『ウィニコットとの出会いーS．フロイト，ウィニコット，そして現在の私たちー』です。先生は 1991 年に森田療法のメッカの東京慈恵医科大学に栄転されていましたので，森田の「純な心」とウィニコットの「本当の自己」の共通性に触れられました。さらに妙木浩之先生によるセミナー講演『ウィニコットと精神分析の間』では，ウィニコットの戦争体験による「夢が見れない」という外傷の話は，ウィニコット論に深みが感じられました。講演後，ラカン派から見たウィニコット論（白石 潔先生），山崎 篤先生のタスティンの話，そして私の精神科臨床の話，と何でもありのウィニコット的シンポジウムでした。

さて，20 回も続いたウィニコット・フォーラム成立の真相は皆さんが知りたいことの一つでしょう。発案は妙木先生です。当時，彼は佐賀医科大学に着任されており，その後久留米大学に移ることになるのですが，幸いなことに川谷医院に週 1 日臨床心理士として招

請することができました。彼のアイデアを耳にしたのは，研究会の場だったのか，それとも，その後の飲み会の席だったのか，記憶がはっきりしません。確かなことは，フォーラム案内状の「小児科医であって分析家であり，多くの症例を通して独自の発達観を展開したウィニコット，精神分析の新しい地平をもたらしたウィニコット，スクウィッグルをはじめとして子どもとの新しい出会い方を考案したウィニコット。こうしたウィニコットについてさまざまな視点から討論するための会を下記の要領で開催いたします。精神医学，臨床心理学，小児・思春期臨床領域，多くの方々の参加をお待ちしております」という文言は彼が草案し，それはその後の案内状でも使われ，それを私が皆さんに郵送しました。彼がアイデアを出してそれを現実化するのが私の役割でした。

知的に魅了された“第２回ウィニコット・フォーラム”

ミレニアムの 2000 年 12 月 17 日の午前の部に症例検討会をもってきて，午後の部は松木邦裕先生の『クラインの２人の分析的息子―ウィニコットとビオン―』，北山　修先生の『エディプスのいない幻滅』の２題というプログラムでした。講演依頼は，このお二人で決まりでしょうみたいな，自然な流れではなかったかと思います。いつものことなのですが，松木先生は講演内容を既に論文にされていました（現代のエスプリ『ウィニコットの世界』にも掲載されています）。北山先生のご発表は，翌年の 2001 年４月にみすず書房から出版された『幻滅論』の後日談に相当するような話だったかな。この頃，私は感音性難聴を患い，特に学会や研究会などの広い会場では話を聴き損なうことがあって，講演後のディスカッションの際に北山先生から突然感想を求められて面食らった記憶だけが鮮明に残っています。

歴史に「if」は無いと申しますが，もし北山先生と妙木先生が時期を同じくして九州に赴任されてなかったら，このフォーラムは産声を上げなかったのではないかと思います。福岡の精神分析界にとって，牛島先生と入れ替わりに北山先生が来福されたのは歴史の妙を思うところです。

色々な思いのある“第３回ウィニコット・フォーラム”

アイデアは妙木先生から出ました。そろそろ御大の二人に登場してもらいましょうよ，というノリでした。『日本の精神分析，東と西』をテーマに，小此木先生には『治療構造論』，西園先生には『依存的精神療法の展開』の講演２題と症例検討会を盛り込み，2002 年１月 20 日開催，という内容の案内状を郵送したのです。これまでの藤沢薬品の会議室では入りきらないだろうと予想して，200 人収容の電気ビル本館地下２階会議室を用意しました。この電気ビルは古びてはいましたが，1957 年にはカラヤンが指揮を執ったホールも完備された申し分のない会場です。フォーラム案内は大好評で，臨床経験 20 年未満の若い人が多数申し込まれている中に一人だけ臨床経験が 30 年を越す人がいました。誰であろうその人は，九州大学から鹿児島の伊敷病院に移られたばかりの神田橋先生でした。

「役者が揃うなー」と楽しみにしていたのですが，残念なことに，小此木先生の健康が優れず，やむなくフォーラムは中止となったのです。

それで，急遽，2002 年 6 月 30 日に藤山直樹先生にお願いして講演『ウィニコットの主体論―オグデンの視点』と症例検討会を組み，会費はお詫びという意味もあって 6000 円を 1000 円にして第 3 回を藤沢薬品の会議室で開催することができました。

軌道に乗ったフォーラム運営

参加者が増えて，会議室が手狭になったので，第 4 回からは開催場所を 150 人収容の福岡交通センター8 階 AB ホールに移しました。講演はクライニアンの木部則雄先生で，タイトルは「子どもの早期発達～『千と千尋の神隠し』によせて～」です。講演前に，映画『千と千尋の神隠し』に関する 22 の質問からなる用紙が配布され，その質問の難しいこと，相当首を捻りました(その内容は木部則雄著『こどもの精神分析』(岩崎学術出版社，2006)で読むことができます)。

第 5 回は西園先生と深津千賀子先生のお二人をお招きして 3 題の講演と症例検討会を組みました。西園先生の『精神分析との出会い，そしてウィニコットとの出会い』と深津千賀子先生の『母性と臨床：ウィニコット的な視点から』のタイトルです。西園先生との約束を果たしてホッとしたのを覚えています。もう一題は，妙木先生による『追悼：日本の精神分析家　小此木啓吾の仕事』でした。

第 6 回は狩野力八郎先生をお招きして『ボーダーラインと抱える環境』の特別講演でした。私は狩野先生の常識的に「あれもこれも有り」と考えられるのが苦手で，何事もハッキリしたい私の性格は，ボーダーラインを取っ組み合っている間に，物事を曖昧なまま楽しむ自分も育っていったのは，ウィニコットを学んだかもしれないし，その現実的対象として狩野先生にお世話になったような気がしてなりません（弁証法による対立物の相互浸透の法則）。

このように 2～3 題の講演と症例検討会というプログラムを九州で 7 回開催していたのですが，妙木先生が東京国際大学に移られたのをきっかけに 2006 年の第 8 回は東京で，さらには館直彦先生が仲間に加わり 2007 年には第 9 回を大阪でフォーラムを開催することになり，以降，3 つの都市で巡回することになったのです。

追記：妙木先生の編集による現代のエスプリ別刷『ウィニコットの世界』（2003）には，ウィニコット・フォーラムで講演された牛島先生，松木先生，藤山先生，深津先生，山崎先生，そして私の論文が掲載されています。

特集

日本ウィニコット協会の設立について

ひょうごこころの医療センター　増尾 徳行

はじめに

日本ウィニコット協会は，2019 年 6 月 3 日に発足しました。この協会は，対人援助職にかかる専門家・研究者に対して，ウィニコットを主とする精神分析的な理論と実践の啓発・普及を推進し，援助利用者が質の高いサービスを受けられるよう寄与することを目的としています。そのためにも，ウィニコットに関心のある方に，広く参与していただきたいと思っています。ウィニコット自身が，芸術的素養も高いうえに，ラジオや新聞雑誌を通じて多くの人に考えを発信していきながら，臨床実践もしていたからです。

そのために，発足にあたっては，国内外でウィニコットにゆかりのある人たちに集っていただきました。詳しくは，協会のウェブサイト（https://www.winnicottforum.com）をご覧ください。協会の案内や過去のものも含めたフォーラムの概要，研究会情報を掲載しています。そのほか会員向けの専用ページでは，これまでのフォーラムで発表された資料をはじめ，関連の文献についてのコンテンツを準備しています。それらは今後，さらに充実させていく予定です。

ここでは，協会が発足するまでの経緯について，紹介します。

ウィニコット・フォーラムの 20 年

日本ウィニコット協会は，ウィニコット・フォーラムに起源を持っています。フォーラムは，東京・福岡・大阪を軸にして，20 年にわたって開かれてきました。第 1 回は，1999 年の福岡ウィニコット・フォーラムです。福岡の川谷と，当時佐賀にいた妙木が中心となっていました。開催にいたる経緯は，川谷の回想にあるとおりです。その後妙木が東京に移ったことで，東京でもフォーラムを開催するようになります。2003 年にフォーラムに招かれた館が関西に移ったことで，2007 年から大阪でも開かれるようになりました。

今私たちが見つけられる資料の範囲で収集できたシンポジウムテーマは，つぎのとおりです。もし抜けている年がどのようなものだったかわかる方がいらっしゃいましたら，お教えください。

1999　ウィニコットの治療感覚（福岡）
2000　－（福岡）
2001　（日本の精神分析，東と西：中止）

2002　－（福岡）
2003　－（福岡）
2004　－（福岡）
2005　－（福岡）
2006　ウィニコットの臨床感覚再考(東京)
2007　パーソナリティとパーソナリティ障害(大阪)
2008　(福岡)
2009　(東京)
2010　ウィニコットと治療構造（大阪）
2011　発達障害のグレーゾーン（福岡）
2012　移行領域の臨床：芸術と創造性（東京）
2013　一人の赤ん坊というものはいない－関係性理論とウィニコット（大阪）
2014　パーソナリティ障害（福岡）
2015　ピグル再考：ウィニコットの事例（東京）
2016　ウィニコットとセクシャリティ（大阪）
2017　「子どものこころ」と発達促進的環境（福岡）
2018　ウィニコット理論の臨床的可能性を考える（仙台）
2019　今，あらためてウィニコットを知る(大阪)

当初はスケジュールの組み方は緩やかで，シンポジウムはあったりなかったりでしたし，代わりに複数の講演があったり，対談があったり，といったものでした。2006 年あたりから，シンポジウムと講演，事例検討がそれぞれ 1 つずつ，という形式が固まってきました。

歴史の継承と協会設立

フォーラムは，さまざまな方の協力を得て，開催されてきました。その一方で，各都市で主催を担った川谷，妙木，館の尽力に負うところがとても大きなものでもありました。20 年をめどに，せめて世代交代，もしくはフォーラムの開催終了を，彼らは思い描いていました。

でも，なくなるのは残念かもしれない，とも思いました。それぞれの地域がゆるく連帯しながら，まずまず人が集まるフォーラムでしたから。それはとりもなおさず，各地でウィニコットの理論や実践のニーズがある，とも言えるのではないか。ならば，このネットワークを通年化して，いろんな人がかかわるようにしたらどうだろう。個人の負担も減るし，各地の交流がより活発になれば，おもしろい集まりになるかもしれない。

2016 年ころから，なんとはなしに考えていたことごとが，だんだんそういうふうにまとまっていきました。そして館が中心となり，これまで開催にかかわってきた人たちと，どのような集まりにしていくか，話し合いを重ねました。設立準備委員会となるその話し合いに参画していたのが，つぎのメンバーです。

生地新，加茂聡子，川谷大治，島村三重子，館直彦，恒吉徹三，増尾徳行，妙木浩之，山崎篤，吉村聡

それと同時に，ウィニコットにゆかりのある人たちに参加を呼びかけていきました。そしてつぎのような陣容で，協会は発足しました。

会長：館　直彦
副会長：妙木浩之
理事：生地　新，大矢泰士，加茂聡子，川谷大治，工藤晋平，島村三重子，館　直彦，恒吉徹三，中村留貴子，深津千賀子，藤山直樹，増尾徳行，妙木浩之，山崎　篤，横井公一，吉村　聡，渡部京太
顧問：北山　修，松木邦裕，Jan Abram，Christopher Bollas，Patrick Casement，Rudi Vermote

協会のこれから

協会の名称には，「ウィニコット」を謳っています。しかしウィニコットは，自身の取り巻きができることを嫌っていました。私たちは，その精神を受け継いでいこうと考えています。顧問の Casement が巻頭言で述べるように，私たちはウィニコットがかつて見いだした何かを用いるのではなく，私たち自身がウィニコットを見いだしていく必要があるでしょう。そうした自発的な動き spontaneous gestures にみなさんも加わってくださることを，望んでいます。

付記

この紹介文の執筆にあたっては，これまでフォーラム開催に多大な貢献をされてきた川谷大治先生，妙木浩之先生，館　直彦先生にご協力をあおぎました。記して謝意を表します。

論考

ウィニコットとタスティン～心の自閉のポケット～

中村学園大学短期大学部　山崎 篤

はじめに

現代のヒトやシステムとのコミュニケーションについて考える時，我々がインターネットを中心とする情報化社会に当たり前のように組み込まれていることを，前提にせざるを得ない。00 年代初頭以降，かつて思いもよらなかった時代になっている。

そこで日常生活について，インターネット上の自らの動きを省みてみる。「さっきチェックしたメールに返信したい（しなくては）」，「この件，ウェブ上に投稿しておかなくては」，「確認しましたにクリックしておこう」。。。ここ 30 分くらいの間に，私個人の頭の中で起きたことである。ネットにつながれる環境なら，ビジネス関係のことはそれなりに何とかなる，という便利な社会になったものだ。座ったお店で「えっ？Wi-Fi ないの？！」。疑問符だけではなく，ビックリマークまで付けたくなる昨今である。つながってないと不安，なのだ。発信できないともどかしいのだ。

SNS を習得する機会を失してしまったので，「FB やっておりませんので」と自虐気味に開き直りつつ，オフィシャルな生活とプライベートを送っている。とはいえ，地下鉄に乗り，老若男女がスマホ片手にして，画面をスクロールする様子を目撃するたびに，前段で述べたような不安やお気持ちはいかばかりかと，拝察する日々でもある。実際，臨床場面でも「社交不安障害」と診断される方々の話に，SNS 絡みの話題が増えた。個人的には，インターネットが我々の生活や仕事に入り込んできたことが，いろんな問題をこじらせている要因の一つではないかと疑いたくなるほどだ。

その一方。

「さっきクリックした商品って，履歴に残るのかな。。。」と思うと，何だかイヤなのは事実である。某社が収集している購買履歴が，其の筋にわたったという話もニュースになったし。大手のプラットフォームを介して，「あなたにおススメ」が当たり前のように送られてくることは便利ではある。好きなミュージシャンのブートレグも，それで手に入れましたっけ。とはいえ，スマホを帯同しているだけで GPS によって位置情報が収集されるハナシ，だとか，ネット上では「忘れられる権利はないよ」だとかの判決が出ることには違和感がある。見つかりたくない，知られたくない，匿名でありたいとも願っている。

もちろんこれは，インターネットでの生活に限ったことではないのではないか。

我々は，隠れることは楽しいけれど，見つけられないことは悲惨だという世界で，実生活での社会的関係，日常生活を送っているものと思う。患者さんから「イヤならログインしなければいい（イヤなら聞かなければいい，とか見なければいいという意味合いで）」と聞いて，何か言い当てられたような気になったりもする。また，しばしば極端な行動に走ることもあるパーソナリティ障害の人々との臨床では，心理教育的な介入として「一番安全・安心なのは，鎖国すること。でもそれじゃつまらないね」とお伝えすることもある。

2019 年にはここでの「鎖国・籠城する」ことの危険性について，注意喚起するような事件がいくつか起きた。当事者には，「鎖国が，あの時点では安全・安心だったのに」，との思いもあるかもしれない。また，「社会的引きこもり」について厚生労働省が出した統計が，驚きをもって受け止められたことも記憶に新しい。

我々が周囲との関係で，「隠れることは喜びでありながら，見つけられないことは苦痛である」（ひらたく言えば，「見つかりたくないけど，つながっていたい」あるいは「見つからないようにしてマス。でも見つけてネ」でしょうかね）という逆説をはらむ体験世界をも生きているのは，確実である。

この隠れることは楽しいけれど，見つからないと悲惨という逆説を主題として，ウィニコットが書いた論文がある。

逆説：隠れることは楽しいけれど，見つけてもらえないと悲惨

かつて自閉症児との精神分析的心理療法に取り組んでいたころ，ウィニコットの「交流することと交流しないこと：ある対立現象の研究への発展」（1963）という論文に出会った。当時私は，目の前の自閉症児との間で起こることを，理解することに苦戦していた（今でもおそらくそうである）。この論文の隅々に引っ掛かりながらも読み進めていくことで，やや自分の視界が広がったように感じたものである。

この論文の主論点をウィニコットは，以下のように述べている。「健康な人は交流をしそれをたのしむわけであるが，別の側面，つまり各個人は永久に交流することもなく永久に知られることも，つまり見つけられることもない，ひとつの分立したもの Isolate である，ということもまた同じく真理なのである」（牛島訳, p.228-229）。私は，人間の心には外部との交流を持たずに進行する経験があるのだと考えるようになった。

ウィニコットのこの論文は，被分析者と分析者が自由連想という方法によって，交流することと交流しないことをテーマとしたものである。その後私は，自閉症児と関ることはなくなり，臨床領域は成人との精神分析的な関係に移っていった。しかしこの論文との出会いは「隠れることは喜びでありながら，見つけられないことは苦痛である←隠れることは楽しいけれど，見つけられないことは悲惨だとの邦訳もある」（1963，ウィニコット）という逆説体験について考えていく契機となった。

考え続ける過程の途上で，我々の心には「自閉のポケット」があるのではないかと書く機会が与えられた（2004）。すなわち我々は，周囲のヒトやモノやコトとの間で，生産的な関係を志向しながら日々活動しつつも，それらとの無関係さが担保された心の領域を保

有するのではないかと考えたのである。時折我々は，自分だけが知っている，自分だけが考えている，自分だけが知っている心の領域に手を突っ込むことで，日々を紡いでいるのではと考えた。そして，その領域での経験を求めているのではないかとも考えた。ウィニコットが述べたように，各個人は Isolate であるという見立てに共感するところがあったのだろう。(Isolate は牛島訳（1977）では「分立したもの」，和田訳(1996)では「孤立したもの」と訳出されている。現代（2019）風には「孤独なもの・存在」と訳してもいいかもしれない。）

2004 年の小論では，冒頭に「I Am a Rock」（サイモンとガーファンクル）という歌の歌詞を引いたので，青年期臭い文章になった。そこでは，人間が Isolate な存在でもあるという考えが，ウィニコットの重要なアイデアである「本当の自己と偽りの自己」や「一人でいられる能力」，また彼の「主体性」に関わる考え等に通底しているものとして，拙い文章で思い切りよくも書いている。書くにあたっては，ウィニコットの論文とごく限られた私自身の自閉症児との臨床経験の吟味と，すがるように読み散らかしていたタスティンの文献を参照した。執筆と呻吟とを行ったり来たりする中で，タスティンの非器質性の自閉状態（Autistic States　＊Autism ではない）についての理解とウィニコットの幾つかのアイデアとの共通点にも気づくことになった。

およそ逆説をはらむ体験というのは，座りが悪い。オグデン（1996）は，ウィニコットのアイデアにおけるこの逆説状況を弁証法的対立と分析した。我々は，自らの心の中で生じている対立的緊張に疲れることも，ブレが大きすぎて驚くこともある。そのあまりにアウフヘーベンを目指さずに，どちらか一方の軸に収めこんでしまい，議論や対立を終わらせたい誘惑にかられさえする。私が念頭におく「自閉のポケット」に手を突っ込むとは，この逆説的状況からちょっとだけ降りて，ヒトイキつくための一つの手段かもしれない。

この度編集委員会より機会を頂いたので，あらためて心のこの領域での経験という主題について書いてみたい
今，あらためてウィニコットについて知る必要があると思う。

交流しないこと：ウィニコット

ウィニコットの「健康な人は交流をしそれをたのしむわけであるが，別の側面，つまり**各個人は永久に交流することもなく永久に知られることも，つまり見つけられることもない，ひとつの分立したもの Isolate である**，ということもまた同じく真理なのである。」（牛島訳, p.228～229）という逆説の，まず交流しないことについて考えてみたい。
ウィニコットの著作に詳しいエイブラムは，「The Language of Winnicott」（邦訳「ウィニコット用語辞典」）で，以下のような指摘をしている。すなわち，交流しないこの隠された自己（secret self）は，「コミュニケーション**しない**という権利を持つだけではなく，本質的に「外界とコミュニケーションしてはならないし，それに影響を受けてもいけない」ものである」（二重「」内，ウィニコットの言葉）というのである。

そこで，この隠された自己が（主体的に）外界と交流しない権利をもつことについて考えてみたい。権利を持つ，ということは主体性，主体感を伴ってそうすることだと考える。そして外界と交流しないことは，本質的に自閉状態であることを含む可能性が高い。

人間は，生下時より外界との相互交流を行っていることが明らかにされている（スターン, 1985 等）。誕生した時点で既に，周囲の（人的，物的）環境との間で，コミュニケーションする資質が備わっているのである。もちろん，この相互交流は，自己にとって都合の良いものばかりではない。その意味では，特に防衛が未熟な乳幼児期にあっては，場合によってはこの相互交流に否応なく曝されていると体験されることもあるだろう。

ウィニコットが小児科医として活動したのは，第二次世界大戦中戦後のイギリスである。とりわけ戦後は，子どもにとっていろいろなものが整っていく途上にあったものだと思われる。（1952 年にウィニコットは，王立医学会精神医学部門での講演で，医師たちに向けて「最悪の小児医学は身体的な健康ばかり重視し，精神の持つ権利を否定する場合」とも述べており，その過渡期的な状況にあって様々な危惧を感じていたものと思われる）。

現代風の，子どもを中心においた子育ても一部あったものとは思う。がしかしのその状況下（「児童の権利に関する条約」が国連で採択されるそのはるか以前）で，ウィニコットが，この相互交流での子どもの心の動きについて，交流しない権利がある，と，この（主体的に）したくないことはしない権利があることを認めて考えたことは，画期的に思える。これは，子どもは交流したければするし，したくなければしないと認めてしかるべきと，子どもの主体性を認めたとも言える。

ウィニコットは「精神病と子どもの世話」（1953）で，環境と子どもの心との関係について詳しく述べている。すなわちそこでは，子どもを取り巻く外界という環境との相互交流において，環境が子どもの侵襲とならないことの重要性を説き，むしろ環境の側が子どものニーズに積極的な適応を行うことの大切さを示そうとしたのである。環境からの侵襲的な働きかけは，子どもの側に反応性の応答を生じさせること，さらには孤立への撤退をもたらすことを述べている。ここでは所与の環境が，子どもの心の主体的な動きを尊重することの大切さを述べていると言える。

子どもの心の主体的な動きにそぐわない関りが侵襲となり，子どもの側に反応性の応答を生むという点について，さらに「人格の基本的な分裂」というタイトルで示された図７を提示している。この図によってウィニコットは，環境に対して子どもの側が，迎合する動きをしてしまうこと，環境の側の積極的適応の失敗が，偽りの自己を生成してしまうことへの危惧を伝えようとする。（この論文中の図１，２とともに，この「人格の基本的な分裂」というタイトルのついた図７は，機会があればぜひご覧頂きたい。）

人格の基本的な分裂，という考え方は，この論文では精神病と関連させる文脈で使われている。とはいえ，心の中の「自閉のポケット」の有用性について主張する私は，図７に書き込まれた分裂された心が，「秘められた内なる生活」を送ることについて次に考えてみたい。ウィニコットは，「分裂が極端な場合では，秘められた内なる生活はその中に外

的現実に由来するものをほとんど何も持たない。それは，本当にコミュニケーションが不可能な状態なのである」（岡野訳, p.99）という。

この交流しない心の部分については，後の「交流することと交流しないこと」（1963）では，主題として論じられた。この論文でウィニコットは「ここで平安は静かさと結びつくことになる」（p.232）と述べている。外的な状況に関わらず，アクセスされない，外界にアクセスしてはいけない，外界からの影響も受けない体験があるとしたら，生体としては変化のない最も安定した状態が保たれるはずである。そこで営まれていることの正当性や必然性，道徳性や危険性について問いが立たない状態と思う。秘められているので気づかれない，見つからない自由さも伴うものと考える。このような体験世界，私が言う「自閉のポケット」が担保されているとすれば，そして時々そこに手を突っ込んで触れて確かめてみることが許されているとしたら，生体としての我々の心は安らぐと思う。

そのように思うのは特に，誰かと一緒にいるところで（主体として）一人で居ることができないような，外界に対する反応性の応答で体験が占められているようなタイプのパーソナリティ障害の方とお会いしている時である。「反応性」という時点で主体が損なわれている。前節で述べた安定した心の状態からは遠い。目を開けば視界に何ものかが見えてくるし，音や皮膚を通して様々な情報が我々の中に流れ込んでくる状況にあって，この交流しないでいるという過程が機能不全を起こしているとしたら苦しい。好きなものにだけ囲まれた，あるいは何も変化のない自室に引きこもりがちになるのも理解できる。

タスティンの「非器質性自閉状態」についての考え

フランセス・タスティン（1913-1994）はイギリスで生まれ，当初は教育者の仕事をしていた。1950 年ころからタビストックで児童精神療法家としての訓練を受けはじめ，長年自閉症児の精神分析的な治療に携わった。ビオンに長らく分析を受け，ビックらから指導を受けるなどクライン派の訓練を受けた人である。ただし，木部（2006）が指摘するように，「決してクライン派の枠内に安住」せず，ウィニコットの論文にも造詣がある。

以下，私が理解している範囲で，タスティンの非器質性で protective shell type の自閉状態についての考えをまとめてみる。

(因みに，今や自閉症を心因性の障害としてだけ語ることは，似非科学者，さらに似非臨床家の誹りを受ける。社会的に有害でさえあるかもしれない。しかし，いつになっても「こうすれば治る：自閉症」的な出版物は後を絶たない。出版不況の折，保護者達の願いに付け込んで，増刷したりもする）

彼女は非器質性の自閉状態という現象を，出生後超早期の時期における，分離の外傷に対する赤ん坊の防衛として考えた。早期の母子関係で母子が一つである（oneness）ことが当然とされるような時期に起きた，早すぎる身体的分離に対する防衛であるというのである。リズム性や接触感等の身体感覚が体験的に優位な乳児期にあっては，そこで起こるビオンが言う意味での破滅的な言いようのない不安に対して，強烈な麻痺させるような身体感覚（tactile hallucination）を軸としたプリミティブな防衛が生じ，それが周囲に対して

shell に閉じこもっているかのような自閉状態をもたらすと考えたのである。自閉症の子どもたちが見せる自閉対象（いつも帯同し，しっかりと握りしめられているミニカーや鍵束など）やお決まりの動作・発声等のこだわりを通して，彼らに tactile hallucination の身体感覚をもたらして分離の不安を防衛し，結果として安心体験をもたらしていると考えた。

タスティンは，授乳の際に口唇と乳首とがつながっているところで，いきなり乳首が奪われてしまうような分離体験を比喩として使う。赤ん坊の体験としては，nothing is left である。赤ん坊の側の幻想としては，母子が一つであるから not-being に見舞われる。すなわち black-hole に引き込まれるような体験が生じるのだろうと，自閉症児との精神分析的心理療法の経験から考えた。非器質性の自閉状態は，その体験を防衛している状態だとしている。

このタスティンの分離のショックに対する防衛が自閉状態をもたらすという考えは，先に述べたウィニコットの子どもの心が，外界からの侵襲に対して自己を偽るという仕組みと同じである。

自験例でしか分からないが，安全な場所で，パニック等起こしておらず，妨げられず自閉的行為にふけっている子どもの表情は穏やかであったり，嬉々としていたり，無理がない状態のようにも見える。例えば，ひらひらとしたブラインドに，曇りガラスを通して映る光と影とを飽きることもないかのように眺め続けていたり。タスティンの自閉状態論に従えば，防衛が成功して安全や安心が保たれているのであるからかもしれない。彼らの同じことの繰り返し（周囲にはこだわりと判断される）は，同じことなので同じ楽しみが確実に得られる最も確実な方法であるかもしれないと，考察したこともある（山﨑，2002）。また，そこでセラピストが何かを為すとしたら，ひたすら侵襲的にならないようにしつつ，彼らが何を楽しんでいるのか夢想しながら，自らを発見してくれるのを待つことではないか，と考えたりもしている。時には，同じ振る舞いをしてみたりなどしながら。

さらに環境との相互作用において，子どもの心身の成長・発達が成り立っていくものと考える時，自然環境にしても物的環境にしても人的環境にしても（もちろん家庭環境も），oneness を求める心からすると，いつも必ずズレていることになる。Oneness への期待がぶち破られるという心的外傷を被った子どもたちは，ズレを恐れるあまりに自閉状態を続けていくしかないのであろう。そのことによって，本来定型の子どもたちに生じるような環境との相互作用は，不確かな，あるいは時期を逸したものとなりえる。強力に何らかのものへの防衛を行うという点では主体性も損なわれかねない。自閉状態を続ける子どもたちへの素朴な「治療論」の一つとして，セラピストとの間でこの相互作用を駆動するということはあり得るのではないか。そうすることで彼らの「発達の伸びしろに働きかける」というアプローチについて，2011 年のウィニコット・フォーラムにて，述べさせて頂いたところである。

タスティンは，「Autistic Barriers in Neurotic Patients」（1986）という魅力的なタイトルの著作で，この非器質性の自閉状態についての考えを，成人の摂食障害や精神病にも拡

大していった。晩年に向けタスティンは，さらに我々人間の心にある自閉状態の体験について考えを広げていった。我々には，自閉状態（外界と交流しないこと）へと向かう心の動きがあるのだという。多かれ少なかれ，我々もかつて，oneness への期待が破られた経験があるのかもしれない。

このようなタスティンを受けて，オグデン（1989, 1994）が人間の体験様式として，妄想―分裂ポジション，抑うつポジションと並ぶ自閉―隣接ポジションを提唱していったのは周知のことである(少なくとも，独立学派の人にとっては)。

尚タスティンは，晩年の「The Protective Shell in children and Adults」（1990）で，特にウィニコットの「発狂恐怖」（1974）という論文を挙げ，次のように記している。「ウィニコットのアイデアの詳細全部について同意するものではないものの，自閉症児に携わることで成している私の仕事は，彼が探索していたのと同じ領域へと私を向かわしめ続けている」（拙訳, p.147）と述べている。彼女は，ビックの指導もあり，存命中のウィニコットと交流することや，著作に触れる機会はなかったという。

最後に。逆説を生きる，楽しむようになるための試論

ある意味，言いたい放題の時代である。一方で，ゼロトレランスの窮屈さも蔓延している。

パーソナリティ障害という診断を受ける人たちの一部は，そんな現代社会にあって本音を「秘められた生活」に留めておくことができずに行動（化）し，傷つけたり傷ついたりして苦しんでいる人たちのように見えなくもないと思う。彼らは本当の自己を持て余しているようにも見えるし，偽る自己に違和感を覚えているようにも見える。本当の自己を貫いたり，偽らずに在ることは，時として眩しく見えさえする。本稿の主題に即して言えば，彼らは本音を隠してそれが見つからないのは我慢ならないので，言動として形にしてしまい，後悔して悲惨な状態に陥っている。見つかることの喜びと悲惨という逆説的事情を承知しておきながらも，その時々の個々の事態を逆説の範疇に保持しておけないということになるのだろう。

彼らがセラピーの場を通して，どのようにしたらこの逆説を生きていけるようになるのだろうか，さらに言えば楽しめるようになるのだろうか。これまで述べたことに関わる範囲で，以下に試論を述べたい。彼らとのセラピーの場ではまず，彼らが言いたいことを聞き（これが自由連想とは根本的に違う），言わないことにも耳を澄ませて聞き届けようとしていくように思う。

何かを言うということは，何かを言わない選択をしたことでもあるし，語る順番を主体的に決定することでもある。セラピストは，外傷的にならない範囲で，沈黙を尊重もする。また，言いたいことを聞くことは，言いたくないことは聞かされない事態もあり得るので，言わないことにも耳を傾ける姿勢を保持する（言わないな，言えないなという違和感に自覚的である必要がある）。

いずれにせよ語ることを求めるセラピーの場に，彼らが語る行為の主体となる余地を開いていくということになる。交流しない権利も認め，セラピストとの交流が成り立っていない心の領域を許容するということになる。
サクッと書いたが，いつも難しい。

ヒア＆ナウで，言いたいことを語ることが生起しようとするところで，語る主体が担保されるようにと，仕向けることを書きたいのだが，本音を言動として形にすることで傷ついたり傷つけたりがあって苦しんでおられることが多いので，彼らはその場で主体性を駆動すること自体に防衛的である。また，仕向けるとしたが，セラピストが彼らをどこかに恣意的に向かわせること自体，彼らの主体性が関与する事態とは葛藤を起こす。結果として，逆転移として「言いたいことが聞けてない」というヒリヒリしたやり取りとなることもしばしばである。それでもセラピストからは，「ログアウト」しない。「会いたくなくてもまた会うこともある，のが精神分析です」といったようなことを時として言ったりもしている。

ウィニコットが狂気と正気の中間領域（1953 等）としてさし示した領域で，遊ぶことのように自分のことを物語ることが生じてくるとよいのではないかと考えるが，いかがなものだろうか。セラピストとの間で彼らが，主観と外的現実という二つの領域を自ら橋渡しして立ちながら，自らを語ることができるようになる，としたら既にそれは逆説的体験をしていることになる。

もちろん我々もアウトかセーフかと本当の自己と外的現実の重なり合うところで，セーフを狙いながら生きているわけなので，自分自身へのアドバイスでもある（ギリギリでセーフを狙うと面白いかも，とも）。

ご批判もあることを承知した上で，試論として提示しておきたい。

文献

エイブラム, J. (2006). ウィニコット用語辞典　誠信書房（館　直彦監訳　北村隆人ら訳）
Ogden, T.H. (1989).　The Primitive Edge of Experience　Jason Aronson Inc.
オグデン,T.H. (1996). こころのマトリックス　対象関係論との対話　岩崎学術出版社（狩野力八郎監訳，藤山直樹訳）
オグデン,T.H. (1996). 「あいだ」の空間　精神分析の第三主体　新評論（和田秀樹訳）
木部則雄（2006). 子どもの精神分析　クライン派・対象関係論からのアプローチ　岩崎学術出版社
スターン, D.N. (1985). 乳児の対人世界　岩崎学術出版社（小此木啓吾・丸田俊彦監訳，神庭靖子・神庭重信訳）
Tustin, F. (1981).　Autistic States in Children. Routledge
Tustin, F. (1986).　Autistic Barriers in Neurotic Patients. Karnac Books
Tustin, F. (1990).　The Protective Shell in Children and Adults. Karnac Books

ウィニコット, D.W. (1952). 精神病と子どもの世話　ウィニコット臨床論文集 II　児童分析から精神分析へ　岩崎学術出版社(北山　修監訳，岡野憲一郎訳)
ウィニコット, D.W. (1963). 交流することと交流しないこと：ある対立現象に関する研究への発展　情緒発達の精神分析理論　岩崎学術出版社(牛島定信訳)
山﨑　篤 (2002). プレイセラピーにおける一人遊びの取り扱いについて―自閉的に漫画を読み続ける少年との導入期の経過から―　精神分析研究 Vol.46(4)
山﨑　篤 (2004). ウィニコットとタスティン－こころの中の自閉のポケット　ウィニコットの世界　現代のエスプリ別冊　至文堂

論考

大人になったピグル

四谷こころのクリニック　加茂 聡子

はじめに

2017 年春，国際精神分析学会雑誌に「『ピグル』の名前」と題されたアメリカのラカン派心理療法家 D.A. Luepnitz による論文（Luepnitz, 2017）が掲載された。これは，晩年の D.W. Winnicott の治療記録「ピグル」（Winnicott, 1977）の患者だった女性が，Luepnitz（以下著者）に「わたしがあのピグルです。」と名乗りをあげたことをきっかけにして，著者による「ピグル―ガブリエル」へのインタビューが実現し，論文化したものである。私加茂は「ピグル」の翻訳に参加していた経緯もあり大変興味深くこの文章を読み，現在の「ガブリエル」と出会うことが出来た。本稿では，この論文の内容の紹介を，引用を交えながら行う。

「ピグル」について

「『ピグル』の名前」は筆者 Luepnitz とガブリエルとの対話を通して，病理・外傷の世代を越えた伝達と名前が個人の主体性を組織する方法について検討した論文である。しかしこの 2 点の議論にあたり，ガブリエルとの対話が多く本文におさめられている。

読者はよく御存知のことではあろうが，まず治療記録「ピグル」について簡単に紹介する。この本は 1969 年の国際学会で Winnicott 自身によって発表された。そして彼の死後，1977 年に妻 Clare Winnicott とピグルの母親の協力により発行された。

「ピグル」と呼ばれていたガブリエルは，2 歳過ぎで妹スーザンが生まれて以来毎晩夜驚に悩むようになり，傍目には性格が変わったように見えていた。彼女は自分の内側に住む「黒ママ」，電車と「ババカー」を怖がっていた。「babacar」は baby car からの造語ではないかと考えられている。両親が Winnicott に相談して治療面接が実現し，初回は 2 歳 4 か月，計 16 回の面接を経て終結時彼女は 5 歳 2 か月だった。初回，妹の誕生について語るピグルに Winnicott は「赤ちゃんはどこから来たの？」と尋ね，「二人とも同じ男を愛しているから」ピグルはママのこと怒っているんじゃないかな，とエディパルな主題を導入する。2 回目では，赤ちゃんがママの内側から生まれてくることを解釈すると，ピグルは「内側の黒いもの」と肯定して安堵する。

ガブリエルはロンドンから離れたところに住んでいたため，毎回電車を使い父親が面接室に連れてきており，時に彼女は待合室と面接室を行き来し，父親が面接に参加したこと

もあった。経過中，両親それぞれから分析家に宛てた手紙での相談や家庭での様子の報告がたびたびあり，さらにその返信から，丁寧に応じる分析家の様子が伺える。最後の面接で恥ずかしがっているガブリエルに対して分析家は「あなたが本当に恥ずかしいときってわかるよ。あなたが私を愛してるって言いたいときだよね。」と解釈し，ガブリエルは同意の身振りをする。終結時，彼女は「本当に自然で，精神医学的には普通の女の子」だった。

この治療が論争を呼んだのは，子供が来談したいときに分析家が会う「オンディマンド」技法が採用されている点であった。Winnicott は子供の週 5 回の精神分析が家庭がこどもの成長を助ける機会を損なう危険性にふれ，その点オンディマンド法の利点がある一方で，週一回の心理療法に妥協案としての価値はないと警告もしている（Winnicott, 1977）。2015 年，スクイグル財団の前理事長である Reeves は「ピグル」を綿密に検討し，治療的な要素について考察した（Reeves, 2015）。ここで彼は Winnicott の事例内での「ババカー」をはじめとした選択的な聞き方に注目した。そして「徹底的ではない」治療の良い結果を示すことに成功しているが，「オンディマンド」分析を代表しているということでは必ずしもないと結論している。それは，来談を要求している主体が誰であるか(家族ではないか）という問題がある上に患者の要求に必ずしも答えられていないからである。

「ガブリエル」との出会い

さて，このかつてのピグル―ガブリエルと Luepnitz との出会いはどのようなものだったのだろうか。Luepnitz はフィラデルフィアでホームレス支援の仕事を行っているが，2015 年の春，ロンドンのある治療者がホームレスに対して精神分析的に行っている仕事の論文に感銘を受けたため，この筆者に宛てて手紙を書いた。このロンドンの治療者は手紙を受け取り，Luepnitz の他の論文を読んだ（Luepnitz, 2009）。そこではホロコースト犠牲者の親族にちなんで名づけられたものの，その名前では呼ばれなかった患者が描写されており，この名づけと多世代間における外傷の伝達が探索の鍵となっていた。その後 Luepnitz が受け取ったロンドンからの返信は以下のようなものだった。（以下斜体部は原論文の引用。）

わたしは，ウィニコットが「ピグル」とあだ名をつけていた子どもの患者でした。わたしの母親の家族はドイツ語を話すチェコ人の難民でした。わたしの母の背景はウィニコットには明らかだったと思います。母には，自身を美しく英語で表現している間も，強い外国訛りがありましたから。イギリス人の慎み深さにもかかわらず，人々はたびたび母(とわたしたち)にどこから来たのかと問いました。ウィニコットはこれらについての好奇心を抑制していたように思えます。わたしはわたしの世代の最初のホロコースト後の子どもでした。「ガブリエル」はわたしの二番目の名前です。わたしのファーストネームである Esther は一族のユダヤ人の歴史と外傷を保持しています。あなたは論文で書かれていまし

たよね「彼らは忠実に彼女を「アルバレス」と名付けたが，そう言うことはなかった」。あなたの論文でこのテーマについて読みながら，わたしがピグルのテキストや，わたしの家族についてなどずっと考えてきたことが結晶化したのです。

その後二人は連絡をとりあい，筆者がロンドンのガブリエルを訪問，二人の出会いが実現した。ガブリエルは 50 代前半の豊かな銀髪と表情豊かな黒い目をもった魅力的な女性として描かれている。彼女はソーシャルワーカーとして働いたのちに心理療法家としての訓練を受けたが，ソーシャルワーカーとして働いていたときから精神分析的な思考を用いていた。また彼女の職業選択には母フリーデルへの同一化があったようである。

ガブリエルの両親と親族の歴史

ガブリエルの母親は 2010 年に亡くなった。ここでガブリエルによるその弔辞を紹介する。

フリーデルはチェコ共和国に生まれました。・・・11 歳のとき彼女はイギリスの学校に送られ，1933 年以降毎学期ごとに弟ゲリーだけを伴ってヨーロッパを横断していました。ちょうど，ドイツで乗り換えて恐ろしいヨーロッパを横切ってきたばかりだったため，イギリスの女子校では，遊び場に行くために道を横切っては叱られることが面白いと彼女は思っていました。1940 年，彼女はひとりでパリに旅行をしており，10 歳年下の弟トムをイギリスに連れて行きますが，このときトムを彼女の息子であると偽造したパスポートを使いました。ナチスは中央ヨーロッパのユダヤ人の多くを殺し，そこには彼女の祖母であるマーガレットや，彼女が大好きだった叔母の Gerta-Esther も含まれていました。わたしたちが彼女との時間や彼女の世代との時間を祝う際には，わたしたちは彼らが生き延びてきたことを覚えておかなければなりません。

…戦時中，母は焼け出された家族のためのロンドンシェルターでボランティアをしていました。…当時彼女はケンブリッジへと撤退した LSE で哲学を読んでいました。彼女は，弟トムの友達との結婚を機にロンドンからオックスフォードへ引っ越しました。父はオール・ソウルズ・カレッジのフェローの中では結婚した最初の人だったと理解しています。

ロンドンでは，母はタヴィストック・クリニックでこどもの心理療法家としての訓練をうけ，いつも仕事を愛していました。…偉大なメラニー・クラインにずっとスーパーヴィジョンを受けていました。精神分析的コミュニティにおける内部闘争と分裂において，彼女は極めて無党派でした。彼女は自分の困った幼い娘（ガブリエル）のために独立学派の Donald Winnicott と契約し，ウィニコットと交わした書簡の一部は，「ピグル」と呼ばれた刊行された事例の一部となっています。このウィニコットとの仕事は，母の人生最後の数か月においてとても大事でした。

「ピグル」のテキストから，母親，あるいは両親が心理療法家ではないか，と思わせる

ところはあったが，確かに，Klein に指導を受けていた心理療法家であったことがここで明らかになった。

ガブリエルは，治療については，自分の履いていた靴と，面接室の棚のことしか覚えていない，と話した。そして，今回の Luepnitz との出会いに至るまで，自分があの「ピグル」だということは，ほぼ完全に秘密にしており，そこにはある種のきまり悪さがあったことを語った。一つは M, Khan の問題行動を巡る Winnicott の取り扱い（妙木, 2018）が問題となって以降，Winnicott の患者であることは「みっともないこと」だったからである。そしてもう一つは，「黒」をめぐる Luepnitz にとっては意外なことであった。それは，意識していたわけではなくても，自分の「黒」を怖がる心性が差別的なものだったのではないか，ということだった。勿論幼いピグルにとって，不在の母親が悪い・迫害的な対象として定義され，母親不在の暗い部屋，暗い内部が「黒」と結びついていたのであろう。しかし若きソーシャルワーカーだったガブリエルにはこの発想は居心地悪いものだったようである。

ピグルが恐れた言葉「ババカー」についてほかの連想があるか筆者が尋ねると，彼女は母方の祖国であるスラヴ地方の魔女「バーバ・ヤガ」について言及している。臼にのってすりこ木をかざし移動するとされるバーバ・ヤガは確かにファリックな母親を示唆しているようであり，経過の中でも「長いおしっこするところ」を持つ母親として空想されている。

ガブリエルが Luepnitz に自らを明かす気になったきっかけの一つはホロコーストと彼女の名前であり，筆者はガブリエルの祖父母や母がどのように東ヨーロッパから逃げてきたか尋ねている。ガブリエルの母方祖父は裕福な羊毛貿易商であり，周囲からおかしいと言われつつ東ヨーロッパから出る決断をした。母親は 10 歳離れた弟トムを自分の子供と偽ったパスポートを持たされてイギリスに連れてきたが，小さな弟をどうしていいかわからずとりあえず自分の学校に連れていき弟はみんなに構われていた。これらのエピソードは親族の中ではタブーとしてではなくむしろ面白いこととして語られていたが，一方で曾祖母のマーガレットや大叔母の Gerta-Esther（ガブリエルのファーストネームと同じ名前をもつ）についてはアウシュビッツで亡くなったということ以上の情報をガブリエルは知らず，またアウシュビッツには訪問したことがない，と語っている。

さて，ガブリエルの父親，毎回彼女を Winnicott の診察室に連れてきて，幼い娘が自分をよじのぼるにまかせていたあの父親はどのような人物だったのだろうか。

彼の両親はアイルランドのダブリンのプロテスタントで，非常に堅苦しい人たちだったようである。何度もの流産の果ての一人っ子として生まれた彼は 11 歳でアイルランドを離れイングランドの寄宿学校に入学している。ガブリエルの父親は，母親の弟トムの友人として出会っているが 1950 年代半ば，母は 30 代，父は彼女の 12 歳年下であり，大変珍しいカップルだった。両親の出会いについてガブリエルは以下のように語っている。

著：何が彼らをひきつけあったんだと思いますか？

ガ：母は父の心に惹かれたのです。父は母もそうであったように，学んでいました。わたしが思うに，父は母のとても文化的で気安い中央ヨーロッパ的な大きな家族に惹かれたのだと思います。

堅苦しい父方祖父母は，訛りの強い英語を話し，家事が不得手なガブリエルの母親（ガブリエルの白いブラウスがほかの色物と一緒に洗われてピンクになったり，塩と砂糖を間違えて料理した，というエピソードが語られている。）とあまりうまくいってはいなかったようだ。しかしガブリエルは風変りだったとしてもこの両親の育児に大きな不満は感じていないと語り，父親が彼女にくれた多くのイラストつきのカードや漫画を Luepnitz に見せている。

両親からの養育についての記憶を巡って，面会以前のガブリエルとの手紙のやりとりで，Luepnitz は 1993 年に発行された「ピグル：性的な虐待を受けた少女？」と副題がつけられた記事についてガブリエルとの対話で言及した。この記事は筆者 Teurnell により，ピグルがネグレクトや身体的な虐待の被害者だった可能性，そしてその事実を Winnicott が見逃している可能性について論じられている。

Luepnitz への返信で，ガブリエルは以下のように記している。

「あなたが Teurnell の記事に言及してくれたことにほっとします。のちの潜在的な書き手にとって，あの記事が「ピグル」を恥ずかしいテーマにしたと考えているので……。わたしは Teurnell の虐待についての推測が正しいとはまったく思いません。思うに，わたしはそれについてのいくらかの感覚や記憶があります。わたしがエディパルで父親のことが大好きな子どもではなかった，というわけではありません。だから，苦労して私たちが男とその妻であるという印象を与えるのはたぶん……。でも全然違うことです！…わたしはこの論文について，わたしがソーシャルワーカーだったときに児童保護のセミナーで聞きました。そこでこの論文は（一般的な）精神分析と虐待的な力のダイナミクス（特に子供の虐待）の共謀の証明として言及されていました。当時，規律があろうとも，愛がないということはありませんでした！」

ロンドンでの二人の対話において再度この話題は話し合われた。ガブリエルはこの記事による影響により，「ピグル」が読まれたり，語られることが憚られるようになったことを憂いている。

確かに，Winnicott の臨床事例において，虐待を疑わせる記述はなされていない。これは実際の臨床での虐待事例の実数と照らし合わせると不思議なことではある。ガブリエルはこの Luepnitz の指摘に同意しつつも，心的外傷への関心が一般的になったのは Winnicott の死後であることを強調した。

そして，ガブリエルが「自分は虐待されていない」と宣言したからといって，虐待の存在への疑いがなくなるわけではない。それでも Luepnitz は自身の臨床家としての感覚か

ら，彼女が被虐児であった名残を感じることはなかったこと。またガブリエル自身が心理療法家として，これらの問題が表面に出るには十分な時間の精神分析を受けていることを述べている。

更に Luepnitz は，記事の筆者 Teurnell がピグルが他世代の外傷について影響されていたことに気づいていたのだ，という提案を付け加えている。それは収容所体験や，こどもの名づけの由来となった女性の死が含まれている。

ピグルの名前

ここで読者の混乱を防ぐためにまず明らかにしなければいけないことがある。通常，私たちが事例について報告するときは偽名を用いる。実際，事例「ピグル」においても Winnicott はピグルはこどもにおいてよくある愛称であると述べている。しかし本当は，「ピグル」においてはガブリエルもピグルも，実名であり，実際に使われていたあだ名だったのである。

ガブリエルの名づけの由来について Luepnitz が尋ねると，彼女はフランスのアンリ四世の愛人だった Gabrielle D'Estree にちなんでのようだ，と説明した。知的で勇敢ではあったが，第一子の出産の事故で亡くなった女性の名前を第一子につけたことは興味深い。Luepnitz は Gabrielle D'Estree の中に，両親が名づけながら呼ぶことが出来なかった，亡くなった大叔母の名前，Esther が埋め込まれているようにみえる，とガブリエルに伝えている。これに応じて，ガブリエルは 8 歳頃に学校では Esther と呼ばれ家ではガブリエルと呼ばれることを選択していたと話した。その後ガブリエルは大学に入学する際，家でも学校でも「ガブリエル」でいることに戻った。その理由についてガブリエルは手紙の中で以下のように述べている。

わたしが家でも学校でもガブリエルでいることに戻ったのは大学に入った 18 歳のときです。「Esther」でいることの大きな不都合は，ディケンズの荒涼館を A レベル試験のために読んだことでした。この広漠な物語の主人公は Esther (Summerson）と呼ばれており，ミソジニーという偉大な国宝のせいにしても，特に面白味ない聖人として描かれていました…。大学に行くことは，それまで男性だけだったカレッジに参入することを意味していました（わたしが入学したとき，250 人の男子学生に対し女子学生は 18 人でした）。わたしは，私全体としてのアイデンティティを持つ必要があると思ったんです。家と学校，女性的でありフェミニスト，そしてわたしについての知的能力全体をまとめた！ （2016 年 7 月 7 日付の手紙）

そして，Piggle についてはどうだろうか。ガブリエル自身は幼児が「Gabrielle」と言う試みが父親のあだ名であった「Piggy-Dog」と混ざったのではないかと想像している。

ここでまた Winnicott が偽名を使わなかったことに戻ろう。今回 Luepnitz にガブリエルが見せた未刊行の手紙で Winnicott はこのことにふれている。

…気づいたことは，わたしたちがこの事例について刊行する際には，他の名前を使わなければいけないだろうということです。…わたしはピグルとガブリエルの名前を変える気になれず，このことをはっきりと言いました。名前を変えることで，その子供に対する感覚がどれだけ変わるかは驚くべきものがあります。もちろん，わたしはガブリエルにおもしろいやり方で尽くし，彼女が治療セッションで多くをわたしにくれたので，わたしは彼女の役にたつことが出来たのです。わたしにとってとても豊かな体験でした。もしガブリエルの名前を変えたら，わたしはとても大事な何かを失うでしょう。

正直，発表の際は個人の特定は防がれるべきという我々臨床家の規範を改変するだけの説得力がこの Winnicott の手紙にあると私には思えない。しかし Winnicott の死後 6 年後の刊行の際にも Clare Winnicott もガブリエルの母親も名前を変えるという選択肢はとっていない。このことはガブリエルを困惑させている。なぜ彼らは名前を変えなかったのだろうか。Luepnitz は以下のような仮説をたてている。

ひとつには，ポーの「盗まれた手紙」ではないが，読者は当然この事例は偽装されており，ガブリエルが本名とは思わない，ということはあるかもしれない。一方で 10 回目のセッションで「わたしはデボラ・ガブリエル！」と宣言する場面では，実名 Esther がデボラに変えられている。一つの可能性はピグルの発行時期はガブリエルが学校で Esther と呼ばれていたのでそのことへの配慮であろう。しかしさらにもう一つの可能性がある。家族が呼ぶことができなかった Esther という名前，アウシュビッツで亡くなった大叔母の名前はテキストに書き込まれることもなかったということである。

Luepnitz はピグルの転移に関係したシニフィエとして，Winnicott というシニフィエに触れている。ピグルは妹スーザンの登場により赤ちゃんベッド（cot）を失った。Winnicott は Win a cot（ベビーベッドを勝ち取る）でもあった。このシニフィエがピグルの Winnicott への転移を促進したのではないか，と Luepnitz は考えたのだ。このラカン派の治療者らしい発想は対談の中でガブリエルを喜ばせている。

Winnicott の声を聴きながら―再び母親のこと，そしてあの治療のこと。

Luepnitz の提案で二人は BBC 放送の Winnicott の講義を聞きながらさらに語らいを進めていく。ガブリエルは彼の声に親しみやすさを感じる一方で，彼の「母親は母親自身の赤ん坊に献身を感じるからうまくやれるのである。」という主張については「つまんないセクシズム！」と一笑に付して，母方祖母から知的な野心が続いていたことを語った。母方祖母は建築の学習を夫から止められていた。そして母親はチェコに住んでいた頃，弟への羨望，同胞葛藤に悩まされていた。正確には悩まされていたのは母親の周囲だったのかもしれない。彼女は 6 歳か 7 歳のときにウィーンに住む A. Freud のところに送られたことがあったのである。治療の必要なし，と送り返されたことに母親はがっかりしたらしい。つまり，ガブリエルは精神分析に送られた子供としては二代目，ということになる。

50 歳を超えた今になって，当時の治療をどう感じているか，と Luepnitz はガブリエル

に尋ねている。特に，当時のピグルが「死ぬこと」に困らされていること，これは母親が抑うつ的だったことを引き受けていたところはないだろうかと Luepnitz は尋ねているがガブリエルの返答ははっきりとはしていない。

著：この 16 回の面接に救われたという感覚がありますか？
ガ：(笑)。ちょっと恩知らずに聞こえるかもしれないけど…感じてないです！…わたしよりも母が負うところ大きかったです。
著：お母さんは，治療があなたを救ったと信じていた，とあなたは信じる？
ガ：そうそう，そうです！

印象的だったセッションについて尋ねると，ガブリエルは円筒定規のエピソードについて以下のように話した。

著：ウィニコットにお別れしたことは覚えていますか？
ガ：いいえ，わたしが覚えているのは円筒型定規で彼を殺したことです。彼を殺すという空想についてひどく申し訳なく感じました。わたしは彼の体調がよくないことや，激しく遊んでもらっていることを知っていました。そこに巻き込まれているサディズムに関する何かを感じていました。

ガブリエルは，「ピグル」のテキストからは，母親の娘に対する応答，その深さに心うごかされている。そして，当時の一家にとってピグルの治療が家族全体を整理したのではないかということ，母にとって Winnicott がいかに大切な人物であったかについて語った。

Luepnitz の考察～世代を越えて持ち越されてきたこととその解消について

Luepnitz はガブリエルとの対話を得て明らかになった情報から，改めて事例「ピグル」はどのような治療であったかについて考察している。東ヨーロッパから母国語を諦めてイングランドに渡ってきた母親が 40 歳を過ぎて初産を迎えることの不安は想像に難くないだろう。更に幼少期に弟への同胞葛藤で苦しんだ彼女の当時の苦痛が次女の出産で再体験したこともテキスト中の書簡にほのめかされている。一方父もまた早く郷里を離れた，多くの流産の後の一人っ子だった。そして母親のユダヤ人としてのアイデンティティは第一子を得るにあたって，アウシュビッツで亡くなった親族の名前 Esther を与えながら呼ばなかったこと，Gabrielle の由来に Esther が含まれていること，などから伺うことが出来る。

こういった事情全てを背負ってピグルは Winnicott の元に連れて来られるに至ったのである。しかし両親の不安はどのようにピグルに伝わったのだろうか。Luepnitz は母親がピグルに歌った歌に注目している。「ピグルの赤ん坊時代を思い出させる歌がある。しかし，最近は両親がこの歌を歌うと，彼女はひどく泣いて「やめて！その歌を歌わない

で！」と言うのだった。……この歌はドイツの歌に英語の歌詞をつけたものであり，明らかに母親と赤ん坊との親密な関係に関わっていた。」（Winnicott, 1977）ドイツ語を母語とする母親が別れの歌を母語ではない言葉で歌う際に，そこに悲しみが含まれていないことはあり得ないだろうと Luepnitz は考える。こうして，意識せず両親の悲しみや不安は歌という手段を経て投影同一化でガブリエルに伝えられていたのかもしれない。

そして母親は，12 歳年下の夫に同胞葛藤の対象である弟を見出しやすかったはことが予想される。それゆえに Winnicott は母親にとって尊敬する専門家でありよき父親でもあった。彼との作業は母親にとっての宝物であり，「ピグル」刊行への尽力の動機の一つともなっていたであろう。

Luepnitz の主張の一つには，この治療の中で Winnicott が果たした成果として，上記のような事情で両親から分裂排除され，投影同一化を通してガブリエルへと伝えられていた不安が，ことにその治療経過の共有や両親からの手紙への返信といった家族のマネジメントを通して扱われていたことである。今回ガブリエルが Luepnitz に見せた Winnicott から両親への書簡の多くが「愛をこめて。DWW」「四人に愛をこめて」といった言葉で結ばれていた。ガブリエルの不安を直接扱った分析的プレイセラピーの外側で行われていた家族への愛情深い手紙がこの治療を支えていたと Luepnitz は主張している。

終わりに

Winnicott の理論はその後広くその後の英国独立学派に影響を与えた。また今回の Luepnitz 論文でわたしたちが知るに至ったように，その発達論の類似もあり，Lacan 派との交流もみられるようになった。2016 年末には Winnicott 全集が発行され晩年の思索メモも含めて読むことが可能になった。今回紹介した Luepnitz 論文含め，Winnicott と他学派を接続した論考，Winnicott 理論を再考する論文は今も発表され続けている。また近年明らかになった資料を基にした Winnicott 研究は今後ますます豊かなものとなっていくだろう。

(本稿は「「50 年後のピグル」とウィニコット以後」として『精神分析の未来を考える』精神療法増刊 5 号 98－103　金剛出版　に掲載されている論考を加筆修正したものである。)

文献

Luepnitz, D. (2009). Thinking in the space between Winnicott and Lacan　Int J Psychoanal 90(5):957-81

Luepnitz, D. (2017). The name of the ‘Piggle’: Reconsidering Winnicott’s classic case in light of some conversations with the adult ‘Gabrielle’ Int J Psychoanal (98) 2:343-370

妙木浩之（2018).「マシュード・カーンの問題」精神療法第 44 巻 1 号

Reeves, C. (2015a). Reappraising Winnicott’s The Piggle: A critical commentary, Part1and2 Brit J Psychother 31(2), (3)

Winnicott, D.W. (1977). The Piggle: An account of the psychoanalytic treatment of a little

girl. London: Penguin books.
Winnicott, D.W. (2016). The Collected Works of D. W. Winnicott Oxford. Pres.

論考

カーン問題からウィニコットを救い出す

東京国際大学　妙木 浩之

はじめに

今年（2019 年）に入って，おそらく法律上の問題から，IPA はマシュード・カーン Masud Khan の論文を，ヨーロッパ国内の IPA が関わるすべての著作，雑誌から削除することを決めた。版権も含めて，カーンの本がヨーロッパの大地からは消えてなくなることが決まった。もちろん事情は倫理から法律上のことで，IPA の帰属した論考にヨーロッパ全体の倫理問題の責任が及ぶことを避けるため，そのように，アナウンスメントからは読み取れる。彼の未刊の「ワークブック」という日記風の著作は，イギリスでは出版されないことになった（法的に米国には及ばないらしい）。今後 IPA では，彼の名前から論考が参考文献として引用されなくなるのだろう。

カーンが一時期著名な精神分析家であり，長く精神分析叢書の編集主幹であり，ドナルド・ウィニコットの著作集の前書の著者であったこと，その優れた解説者であったことは良く知られている。なかでも翻訳されてはいないが，ウィニコットの最初の論文集の前書きは実に素晴らしい。さらにフランスの精神分析協会にウィニコットを紹介したことでも，その影響力の大きさは知られている。そのカーンが 1988 年に英国精神分析協会を除名された。著作『春が来たとき When Spring comes』で反ユダヤ的な叙述を行ったことで倫理的な問題があるという理由ではあったが，それ以前から彼についての噂があり，精神分析の世界から排除されたことは，イギリスの精神分析の世界では有名であった。すでに 1976 年には，精神分析協会の候補生から，同じく候補生である彼の妻との性的な境界侵犯が訴えられ，当時倫理委員会がなかったので，訓練委員たちで議論されたという記録がある（詳細の議事は残されていない）。カーンは訓練分析家の資格を取り下げるように要請されて，resign ではなく retire という署名を提出した。つまり自ら，訓練分析家の地位を降りたわけが，分析家のままでい続けていた。周囲は彼に関して（失礼な言い方だが），肺がんが診断されていたので，それほど延命しないという判断もあって，引退の届出が受理されている。だがその後彼は 12 年間も生きている。そして先ほどの本が出版されて，シニアのメンバーが反ユダヤ主義を訴えて，正式に英国精神分析協会から分析家として除名されている。彼についての噂はたくさんあり，どこまでが噂かは不明だが，枚挙にいとまがない。カーンに関する著作が 88 年の除名後，3 冊出ている。彼の知り合いであったクーパーCooper（1993）のもの，ウィロウビーの 伝記（2005），そして分析協会のリンダ・ホプキンス（2006）の論考である。それぞれの立場は微妙に異なるが，それらを 3 つ

の方向から読み直す価値がある。特に最近の 2 冊は，前著と対比的な部分が多い。それはクーパーが，カーンの知り合い（患者）であったためで，弁護という形で，カーンという人物の魅力と，その業績を，問題点とともに論じたもので，カーン寄りの本といっていいので，2 冊とはかなりニュアンスが異なっている。

ちなみに倫理的な再検討が行われるようになったのは，2001 年 2 月のロンドンブックレビュー誌に「マシュード・カーンを救い出す Saving Masud Khan」という 4 ページほどの記事が掲載されたからである。著者のゴッドレイ Godley（1926-2010）はもともと 20 歳代ではオーボエ奏者だったが，その後経済学を納めて，応用経済学の研究者になった人である [1]。彼の成育歴は，悲痛なもので，彼が生まれたときには両親は不仲になり，互いにほとんど会わなくなり，疎遠だった。彼は母親ではなく，乳母，あるいは厳しい女中によって世話されていた。彼の母親は詩人で戯曲家，ピアニスト，作曲家で女優だったが，家に不在なことが多かったからである。一緒に暮らしているときでも，母親と言うよりも，自分の性について明け透けで，そして父親がハネムーンのときから不能だったと語るような女性であった。三人の兄弟のうち，彼の姉キャサリーンは精神的に遅れていて暴力的になっていき，最終的には精神科的な施設に入所している。両親はほとんど社会的な生活を営んでいなかったので，子どもとして遊び友達もいなかった。6 歳のとき，彼の片耳は 90 パーセント以上聞こえなくなった。10 歳のときに父親は祖父母の遺産を受けて豊かになったためにノラという女性と再婚して，召使の多い邸宅で 3 人の子どもを引き受けていたが，不機嫌に満ちた家庭生活を送っていた。父親は飲酒の習慣があった。彼の家族の顛末は悲惨であった。義母であるノラはショットガンで自殺した。父親は遺産を食い潰して，看護婦が優しくないという病院で亡くなった。先述した異母姉は精神科施設に生涯入所しており，母親は脳梗塞の後に，半身麻痺が続き，6 年後に亡くなっている。ゴッドレイが精神的な混乱を起こしたのは，30 歳で母親が亡くなった後であった。うつ状態。彼は心理療法が必要だと感じて，友人を介して，1950 年代の後半にウィニコットに連絡をとった。

ゴッドレイはウィニコットのことを「とてもかよわいスペンサー・トレイシー」のようだったといい，そのやりとりは興味深いものではある。ウィニコットは彼に「（子どもの頃）一緒に持っていったもの（対象）があるかい」と聞き，彼が「万華鏡」と答えると，ウィニコットは「それは堅いものだね」と言ったという。ウィニコットはパキスタンの分析家を紹介したいが，と聞き，彼のことを「孤独な少年だったのだね」と述べたという。そしてカーンを紹介される。マシュード・カーンとゴッドレイの治療関係はどれをとっても，患者の側の転移の産物とは思えないような驚くべきものであった。カーンは最初から彼の妻の父親が有名な彫刻家エプシュタインであることを調べていて，その名前について聞いてきた。ゴッドレイは，匿名性について不安になったという。彼はロイヤルバレエのスベトラ・ベリオソヴァと 10 日後に結婚することを語り始めた。すでに匿名性に疑問を持っていたゴッドレイは，ますます不安になった。面会の後で，カーンは彼を車で送り，

[1] 記事は今でもインターネット上で読むことができる。

別れ際にジョイスの詩集を手渡している。記事の後半は，ますます驚くようなもので，ゴッドレイのセッションのほとんどはカーンの社会生活に組み込まれていった。疑問ではあるが，カーンは，カーンの患者と不倫を勧めたりした。そして最終的にゴッドレイはウィニコットに「カーンは気が狂っている」と電話し，ウィニコットが訪ねてきて，カーンと二度と会わないようにという設定をして，彼のセッションは終わっている。

この短い報告によって，ウィニコットとカーンとの関係がある種のスキャンダルと公にされたのである。著名な分析家の境界侵犯として，そしてカーンを通して，ウィニコットの分析もやはり疑問視されることになった。

ゴッドレイの記事は，カーンを本当に「救い出した」のだろうか。否，カーンだけではなく，ウィニコットを追いやったのではないか。この詳細は，彼の著作後に調査を行ったサンドラー夫人 J.M. Sandler の報告に詳しい。そこでの議論は，結果として今日の IPA の決定につながっていることになる。結果は埋葬と消去であった。

私たち日本人は，この点で IPA の決定を慎重に吟味するだけの地理的，法的な余裕がある。なぜならカーンの歴史は，ウィニコットを語るうえで，必要不可欠なパートではないか，そう思うからである。ホプキンス（2006）の主要な論点でもあり，英国精神分析協会のコンセンサスに関する議論のなかで論じられたものを，ウィニコットの仕事のなかで位置付ける必要性を切に感じる。そしてこの作業は，葬儀が行われ埋葬されるだけでなく，消去されるなら，ますますそう思う。しかも発掘と位置づけは，今だからできる作業なのかもしれない。結果としてカーン問題からウィニコットを救い出すことが正しいかどうかは不明であるにしても。

IPA が代表する精神分析にとっては，ホプキンスが指摘しているように，ウィニコットのカーンの分析は，対象の使用の失敗であり，破壊性を取り扱わない，という点で，リトルの分析とパラレルである。その後もウィニコットが分析しているカーンを擁護して，彼を分析家にしていったプロセスは，カーンのもともとの失敗を実現してしまったという論点が，今日倫理的な視点からの趨勢なのだろう。ウィニコットの臨床的な失敗。だが本当にそうなのだろうか。ウィニコットの著作集が出版され，晩年のウィニコットの全体像が分かってきた現在，この読み方に修正を加え，倫理的な問題とウィニコットとカーンの力動について精神分析的に考えなおす作業をしてみたい。

帰り道のないイギリス留学：精神分析家になる

カーンは 1946 年 10 月にイギリスに留学して，22 歳のときに英国協会の候補生になっている。46 年という年は，映画『英国提督最後の家』で描かれた 1947 年のインド―パキスタンの分裂の一年前，混乱期にあたる。その年の前後には多くのインド人，パキスタン人が混乱で亡くなっている。この数年の間に，二つの国が生まれ，インド地区は，大混乱，そして後々まで祟るような惨事が繰り返されたからである。カーンは英領インド（現在のパキスタン）の地主の父親のもとに生まれて，インド領の時代にイギリスに渡り，そしてパキスタン独立後は，その地に決して戻れなかった知識人の一人だろう。

カーンに関する限り，イギリス留学のプロセスの正確な記録が不鮮明なのは，そのためもある。わかっているのは，分析協会にアプライして，シャープが最初の分析家だが 9 ヵ月後に亡くなり，ジョン・リックマンのところに分析を受けて，1951 年にリックマンが亡くなっていることだ。最近翻訳したブレット・カーBrett Kahr の『ウィニコットとの対話』には，カーンの分析の間，リックマンが倒れて，そのまま亡くなったとある。リックマンを抱えてその死の現場にいたショックはどれほどなのか，と思う。もともと彼は妹，そして父親の死を契機としてうつになった。それを契機として治療を受け，インド領であったパキスタンの地からイギリスに留学した。そして次々と分析家が亡くなる。この喪失の連続が，彼の症状であり，彼の人生なのだ。その後 51 年にウィニコットとの分析が始まっている。カーン自身の記述によれば，その分析は 15 年間続いたという。また別の評伝では 61 年までとなっている。後述するが，どうもこの年数は，カーンの主観，思い込み，あるいは悪く言うなら偽装らしい。

カーンの最初のケースはアンナ・フロイトの SV で 1948 年 10 月からはじまるが，次の年の 6 月には教育研修委員から終結を申し渡され，そのケースはシルビア・ペインかクラインから受けることが推奨されている。4 ヵ月後 2 例目が行われて，1950 年には 26 歳で分析家として登録されている。彼の報告は，記録によればきわめて優れた学術性をもつものと見なされていた。分析家候補生になった後，1952 年には児童分析の SV がウィニコットから行われており，二番目はマリオン・ミルナーから，三番目はクリフォード・スコットから行われている。1953 年に正会員への論文は「マスターヴェションへの防衛としての同性愛的なエピソード」という題名で，最初は倫理的な理由から選ばれなかった。事例の匿名性が問題になって不適切として，申請は受理されなかったらしい。1 年後の 1954 年の終わりに，再度，投票されて 32 対 15 で受理された。そこに参加した人たちは，分析論文の内容ではなく，分析家の質を問題にしていたといわれている。この点では，彼の学術性の評価とは対比的で，周囲の訓練分析家たちからの意見に彼の態度が問題にされており，簡単に受理されなかったらしい。1 年後，ウィニコットの勧めで，訓練分析家への申請が議論されて，再度三度落ち，1959 年（四度目）に申請が受理される(ただしこの三度は，それほど珍しいことではない)。

繰り返すが，彼が優れた理論家であることは間違いない。55 年から 77 年の間，ホガースの精神分析ライブラリーの編者を 20 年以上にわたって務めて，International Journal of psychoanalysis および International Review of psychoanalysis のアソシエートエディター，フランス精神分析協会誌の海外エディターであった。彼が優れたウィニコット解説者であることは，英仏両国で有名であった。ウィニコットとの関係で言えば，1950 年代から日曜日にウィニコットと共にその著作の編纂に関わり，71 年まで彼の本の序文に現れているような「ウィニコットの愛弟子」（Sutherland の言葉）であった。だがしばしばこの蜜月関係は，分析関係との多重関係ではないかと疑問視されてもいる。というのも，カーンに言わせれば，ウィニコットとの長い分析関係があり，だとすれば，その後児童分析でウィニ

コットの SV が終わった後も，彼を自分の著作の編集者として利用していたことになるからである。

ここでカーンの代表的な著作をまとめてみよう。The Privacy of the Self (1974) は，ホガースから分析双書の一冊として出されたが，彼の知名度を上げた。さらに倒錯の「つぎはぎ対象」という論考を中心とした Alienation in perversions (1979) がある。また論文集だが，Hidden Selves (1983) が出されて，先述の『春が来たとき When Spring comes』(1988)，この著作の P.62「Judaic-Yiddish-Jewish」などの表現が反ユダヤ的であることや事例に逸脱が見られるという理由から，問題になって，倫理的に除名されることになったものだが，美しい文章だと称賛した人も少なくなったという。

さて上記の本に収容されているカーンの仕事を大まかたどっていくと，その理論的な精緻さには驚かされるが，まとめると次のようになるだろう。

① カーンの自己論は，自己を内的な環境の表象として考えて行く。
② フェアバーンやボウルビイの理論をメタ心理学的に整理しながら，自己の構造論を構築する。
③ 彼のスキツォイド人格理論は，フロイトの自己論と，フェアバーンの構造論を，ウィニコットの促進環境論とを纏め上げたものである。
④ 累積的外傷理論が登場する。
⑤ 人格障害，恐怖症的なスタンス，さらにヒステリー（境界例人格）が環境の失敗として定式化される。
⑥ 倒錯における collated object の考え方を導入する。
⑦ 臨床的な夢解釈における夢空間の考え方を利用する。
⑧ 臨床的な潜在空間論と抱えることを強調する。
⑨ 逆転移を保つと待つ。

なかでも特に注目されているのは「累積的外傷」の仮説と倒錯に関する対象関係論的な考え方になる。また夢が見られることを重視した夢空間という概念や，潜在空間論は臨床的な拡張性が高い。それらはウィニコットの理論の延長上に，カーンがさまざまな理論を組み合わせて，独自に作り上げたものだと言える。

もちろん事後的に（彼が批判されるようになってから）カーンの理論構成に使われる事例記述に関する疑問が提示されてきた。つまり分析家としての彼の著作のなかには，彼の臨床を疑問視する考えもある。例えば，彼がベルボーイならぬ，男の召使さんを臨床場面のマネージメントで使っていたとか，分析セッションの外で簡単に出会うとか，さまざまな倫理的な問題が臨床に関しても取り上げられてきた。

こうした自由な振舞いに関して，クーパーの反論が興味深い。クーパーによれば，これらの習慣は彼の生地ではそれほど特別なものではなく，召使いを自分のマネージメントのために使うのも，また性的な逸脱と見えるものは，一夫一婦制が強いヨーロッパの視点から見ておかしいというだけかもしれない，という発言である。またウィニコットの臨床と重ね合わせてカーンの実践を一言で語るのは難しいが，カーンがウィニコットとの関係で

自由な臨床スタイルを取り入れながら，独自に修正して使っているという見方は，最低限残されているし，直観的で優れた臨床的な実践という，今となっては過大評価も可能らしい。でもクーパーに関しては，カーンの患者の言葉だからなあ，と多くの読者は思うに違いない。

本当の自己の場：カーンの生育歴

カーンの生育歴について述べてみよう。3 冊の記述は微妙に異なるが，それらをまとめてみると，大まかには次のようになるだろう。彼は，分裂後はパキスタンになった土地で，76 歳の父親（地元の名士）と 17 歳の母親（高級娼婦という説すらある）の間の子供として生まれた。この年齢差の女性を後妻として設けるのはパキスタンでは，豊かな地主などでは日常的なことだったらしい。隠居生活に近い父親と，若い母親の地位的な問題から来る疎外があり，大きな土地をもっていたカーンの父親は，途中で母親を貧しい土地に追いやり，カーンだけを自分の周辺の乳母に育てさせた。カーンはこの分離のためか母親へのこだわりが強かった。16 歳のとき（妹と）父親が亡くなる。その前後で抑うつになっている。パキスタンで精神分析的心理療法の治療を受けて，さらに英国（英文学の学士をもっていたので）へ留学をする。英領インド（現パキスタン）の治療者は，彼に英国でも精神分析を受けることを勧めたと言われている。

渡英後彼と面接した英国協会のボウルビィは，彼が患者だとは思わなかったのか，英国精神分析協会への候補生だと考えたらしい。候補生になってからの，分析家の対象喪失は，先述の通りで，そこでウィニコットと出会うのである。ウィニコットとの長いと言われる分析，そして共同編集作業（51-66 年）がここから出発した。その間ウィニコットの著作をともにまとめる作業，それは著作集として出版されている（日曜日の編纂作業をしていた）。こうして彼はウィニコットの解説者になっていったのである。

リンダ・ホプキンスの主な論考は，ここでのウィニコットのスタンスに対しての批判である。つまりウィニコットは陰性の攻撃性や破壊性を回避しているし，それがカーンに深刻な伝達をもたらしていると指摘している。ウィニコットの「プレイ」を大人の患者に持ち込むことやウィニコットの Violation の問題が生み出されやすい。だからホプキンスをはじめとしてカーンの分析の失敗という指摘が複数の分析家によって行われてきたのだ。ウィニコットとカーンの分析が自称 15 年も続きながら，SV，本の編纂と訓練分析家の申請などが行われている多重関係と関連しているという議論である。つまりそこは分析家ウィニコットの悲惨な結果を生み出した枠の transgression の問題，そしてこの点では，ウィニコットに対する批判のなかで，カーンが論じられている傾向がある。そもそもウィニコットはなぜ被分析者カーンを，自分の論文集の編集者にしたのか。ここにはウィニコットの仕事と私的な世界の混同がある，と。

ウィニコットの存在がカーンの問題に影響しているのは，明らかだった。カーンが治療の中での問題としてウィニコットの病気を心配していたらしいという報告は 3 冊の本に共通している。そしてカーンの分析の反復として，彼はウィニコットとの関係で抑うつ的に

なり，アルコールに依存するようになっている。ここには彼の根本的な病理の反復がある。そもそもカーンは根本的な怒りに満ちた人だった。この点も三冊が共通して指摘している。

カーンの人柄を指摘した（彼に最も好意的な議論を展開する）クーパーは，彼の人格的な特徴を

① 激怒 Outrageous：彼が最初から怒りに満ちていたことは多くの証言が裏付けている。

② 知性と直感 Intelligent＆Intuition: 同時に彼がきわめて優れた知性と臨床的な直感をもっていることも多くの人が肯定している。

③ 偽装 Disguise: 自分を「プリンス」と呼び大会に皇室を呼び馬車に乗って接待する，そしてそれを装飾する，尊大な自己愛的世界をもっている。これはイギリス社交界に残ろうとする彼の努力であった。

と述べている。やや短絡的な，しかも嘘つきな人格が思い浮かぶ。好意的な議論を展開しているクーパーすらそうなのだ。だから難しい人であることは間違いない。だが，それにもかかわらず多くの患者や被分析者たちが指摘していることだが，家族が彼を大事にしておりパキスタンでの良い人間関係をもってきた。それに対して，わかっていることは，カーンの逸脱は，70 年代以後に顕著になってきたこと，つまり母親とウィニコット，そしてその後，彼の兄が亡くなってからなのである。つまり彼の不調が顕著に世の中に出てきたのは，晩年の対象喪失と関連しているらしいのである。

ここで彼の仕事を二つ紹介する価値があるのだろう。ひとつは「累積的外傷論」（1963）である。累積的外傷は，子どもが保護膜としての母親（あるいはその代理）を必要として，使用する発達段階に起源をもっている。一時的で不可避な失敗は，成長のなかで修正されたり，回復するだけでなく，成長に於ける新しい機能の栄養になったり，刺激になったりする。病的な反応の核が生じるのは，その失敗がきわめて頻繁で，あるパターンのリズムをもち，心身的な統合に，消去できないほどの侵襲になる場合のみである。これは理論的には初期の倒錯とスキツォイド人格の問題の延長に，外傷の新しい理解が可能になった論考であり，今日でも理論的にトラウマに関する重要な論点を多く含んでいる。だがここではカーンの幼少期を捕捉する理論としてみたらどうだろうか。さらに「つぎはぎの内的世界」とウィニコットの偽りの自己を通して考えると，表に書いたように，彼自身の幼児期の母親体験，そして倒錯的な傾向を描いているようにも読めてくるのである。累積的な対象喪失は，彼の人生の反復である。そして偽装による倒錯のつぎはぎもそうだ。

リンダ・ホプキンスが指摘するように，ウィニコットの視点から見たら，このつぎはぎは「偽りの自己」の偽装となる。本当の自己が見えないようにして，社会的な迎合するために偽りの自己，過剰適応する自己に作り上げた。カーンは，いろいろな著作のなかで自分をプリンスと言った。もちろん地主の子供で，王族とは無関係だ。だがこの偽名が英国社交界に変装して入り込むための方法だった。プリンスは大半はつぎはぎ的だったと言え

る偽りの自己のあり方なのだ。そしてそのつぎはぎの最も重要な一部にイギリス人であるウィニコットがいたと言えるのだろう。

逆に言えば，晩年ウィニコットが「偽りの自己」理論に到達したときに，その理論の中核である迎合的な姿を実現していたのがカーンであった。カーンはインドでは英文学を学んでいた。だから英語圏で精神分析のトレーニングを受けたが，つねに本当の部分はパキスタンにあったからだという推測が成り立つ。ウィニコットは英国偽装のつぎはぎの中核なのだ。

こうしてカーンはバーナード・ショーの娘と結婚，そして離婚，さらにはバレエ団のプリマドンナとの結婚，そして離婚，イギリス社交界に残ろうとした彼の懸命の努力を見て取ることできる。彼の本当の自己が英領インド（パキスタン）という失われた大地にあったという推測はあながち間違ってはいないように見える。

母国語の不在

47 年のパキスタン分割，その後パキスタンの分断も含めて，彼が失ったものの大きさは，母国語でもとのパキスタンの親戚とともに語る彼が実に生き生きとしていたというクーパーの逸話から推測することができる。彼はある意味でウィニコットと同一化することで偽りとしてしかイギリス社交界に自らの空想の世界を生きていたが，本当の自己はつねに不在のインドの場にあったのかもしれない。

近年，ウィニコットとカーンの分析は，ウィニコットの治療スケジュールの研究から 1951 年から 1954 年という 2 年ちょっとの間行われた毎日分析であったことが分かっている（Goldman, 2017）。とすれば，SV の提供はともかく，ここに分析と指導が混じっているという問題はない。もしウィニコットが関わったのが 50 年代前半だとすれば，カーンがもっとも才能のある業績を書いたのは，分析のすぐ後だったと考えられる。そして先ほどのゴッドレイの事件はウィニコットに少なからず影響を与えて，ウィニコットはカーンを気が狂っていると思い，カーンとの関係を学問の世界に限ったとみれば，どうだろう。多重関係の問題は若干緩和される。ウィニコットの枠組みの問題はそれほど大きくないということになる。

実際ウィニコットも，カーンの妻ショーとの分析を，カーンが求めたという経緯を書き残している。つまりカーンは自分の妻であり混乱していたバーナード・ショーの娘，ジェーンの分析をウィニコットに頼んでいたために，彼自身の分析を終結せざるを得なくなったのである。その付近の年代を並べてみよう。

1951 年　カーン，ウィニコットとの分析を開始
1952 年　カーン，バーナード・ショーの娘ジェーンと結婚
1953 年　ウィニコット，ショーの分析開始（ジェーン入院以後，本格化）
1954 年　カーン，ウィニコットとの分析を終了
1955 年？カーン，ベリソヴァとの不倫関係
1955 年-77 年　カーン，ウィニコット本の編集，および精神分析ライブラリーの編集

1958 年　カーン，ジェーンと離婚
1959 年　カーン，ベリソヴァと結婚
1959 年　カーン，ゴッドレイとの治療体験開始
1959 年　カーン，四度目の正直で，訓練分析家になる
1960 年？カーン，ゴッドレイとの間にウィニコットが介入

この流れなら，実質的に，ウィニコットはカーンの問題に 60 年代には気が付いている。だがならばなぜカーンはウィニコットとの 2 年ほどの分析を 10 年以上にわたってずっと続いたかのように書いたのだろうか。編集の手伝いも含めてウィニコットの分析のように。

ここでカーンにとって，ウィニコットと関わり続けることが，偽りだったとしても彼の生き方を支えたのだと考えるなら，どうだろうか。おそらく「オン・ディマンド」でウィニコットはカーンの相談には乗っていたのかもしれない。だからカーンは困ったとき，ウィニコットを主観的対象として頼った。

ここでヒントになるのは，晩年のウィニコットが，長年にわたって人を支える『ピグル』のような事例を臨床的な態度として認めていたことだろう。カーンはウィニコットの分析がはじまって，社交界の花形であり，知識人の代表者であったショーの娘で，（母親と同じ）ダンサーであったジェーンと結婚した。ダンサーは母親の職業であった。そしてそれは彼に英国籍をもたらした。だがジェーンは深刻な病気であったため，その結婚は破綻して（ここでもウィニコットに頼った），結果としてベリソヴァとの不倫の末，再度の結婚をもたらした。この離婚と再婚の繰り返しは，ちょうどウィニコットが，アリス・テイラーとクレア・ブリットンとの間で繰り返したものの反復である。この点で，カーンはウィニコットとほぼ同じ結婚生活，離婚と不倫と結婚をしており，無意識かもしれないが，取り入れ同一化が起きている。最後ウィニコットの著作に関して，クレアはカーンと遺産相続の地位を争い，カーンは完全に敗北するにしても，である。

ここには，留学と亡命の深刻な問題が隠されている。一般に留学生にありがちなことだが，イギリスを理想の地としやすい，カーンにとってイギリス人ウィニコットは偽りの自己の中核であり，理想化対象であった。だがウィニコットとカーンが違う点は，ウィニコットは生粋のイギリス人で，フロイトの翻訳者であったストレイチーからさんざんドイツ語を読めと言われていたにもかかわらず，ちっともフロイトを読まなかったが，カーンは英語の勉強のためもあって，本の虫だったということだろう。ウィニコットは理論を取り入れるよりも，自分の言葉，母国語を使って自ら発見することのほうを重視した。留学もしなかったし，関心もなかっただろう。

ウィニコットがカーンと出会ったのは，クライン学派から離れて，自分の理論を組み立てていた時期だった。51 年には「移行対象」の論文が書かれて，彼は晩年の臨床理論を組み立て始めて，理論が構築されていくプロセスと結婚，不倫，再婚は重なっている。ウィニコットは第二次世界大戦での経験を，精神分析から新しい体験として組み立てていった。カーンはその理論を理想的なものとして取り入れていった。興味深いことだろうが，

ウィニコットの「偽りの自己」の理論，それは論考 1963 年の「交流することと交流しないこと:ある対立現象に関する研究への発展」で登場するが，先の年表を見るなら，本当の自己と偽りの自己の概念化こそ，彼が見ていたカーンの姿のように読めるような重なり方である。違う点は，カーンがウィニコット理論そのものを生きていたように読めるところである。カーンの累積的な体験が，環境の侵襲的な要素に対して，心が組織する自己の一側面として「偽りの自己」を作り出した。表面的に見れば過剰適応であり，内面的に見れば秘密の自己でもある，これがウィニコットの偽りの自己論であった。そこでは秘密の，本当の自己はつねに表面化しない。まるでカーンの出会いと彼との距離のなかで，1955 年以後にウィニコットが行った洗練化であると見なすことができるそうだ。

こうした過剰適応を，私たちは分析のために留学した多くの分析家たちに見ることができる。イギリスの理論を理想化して，そこに寄生してそこから抜け出せなくなる。そして事後的に見るなら，ウィニコットがカーンを分析していた 2 年ほどの短い期間を，カーンの人生と照らし合わせてみると，この分析の間に，カーンは英語人格＝ウィニコットの理論を吸収し，彼に重要な理論的な発展をもたらした。私たちが留学生に見る偽りの自己の典型例である。理論において，この時期がカーンのもっとも創造的な時期とみることができる。偽装というよりも，それは模倣だが，模倣でも水準が高いなら，それは素晴らしい姿をしている。だが結婚と同時に，イギリス国籍を得て，彼は自らイギリス性を前提にすることができるようになった。これは彼の願望を実現したとはいえ，彼はパキスタン性という本当の自己を，偽りの仮面で隠すことになった。精神分析学会で知的なリーダーとして振舞うことができるようになったからだ。彼の 60 年代の業績と，臨床で過剰に「抱える」や分析家が自由に振舞うことの強調は，ウィニコットの模倣者であるように見える。

もし 51-54 年がウィニコットとの分析の時期で，その後カーンがきわめて生産的な概念を生み出したとすれば，60 年代につくりあげたつぎはぎ的なウィニコットは，その後も 70 年前半までは効果があったのだろう。彼のアルコール依存はベリオソヴァとの結婚の時期からはじまり，ゴッドレイの証言はそれを公表したものになっている。

彼は候補生の頃から英国協会におけるクライン学派に対立しており，理論的にはフェアバーンとウィニコットに共鳴している。「疎外」が集団を支配しているが，それが後々まで，彼のイギリスでの戦闘となってしまった。彼はウィニコットと同じように戦う，そしてこれも事後的に興味深いことだが，ウィニコットが亡くなったときに，具合を崩し，結果として英国協会から除名されている。結局イギリス人にはなれなかったし，今やヨーロッパから彼の論文は削除されようとしている。彼は最後までウィニコットのイギリス性に，イギリス人としてのウィニコットのつぎはぎの断片のなかで生きた。だから彼は 54 年で終わった分析が，66 年まで続いたと思っているのだ。理想自我の部分は，彼のイギリス性によって，偽りの部分を構成していたのだろう。

母国語臨床：母親とウィニコット

さて生育歴から彼のウィニコットの出会いを考えてみれば，カーンの父親との問題は，深刻な「うつ」をもたらし，心理療法を媒介としてパキスタンからイギリスに留学をもたらした。本国の混乱を写すかのように，誤解が起き，彼は患者から候補生になった。そして分析家が死に続けた。だが最後にたどり着いた，ウィニコットを親代わりにつぎはぎ化して理想化することで，異国的な偽りの自己を作り上げた。だが 72 年に母親，そしてウィニコットが亡くなるのである。60 年代後半から，つまりウィニコットが学術的にはカーンを評価しつつ，支えてきた関係が終わり，未亡人であった二番目の妻クレアは，カーンの問題を見聞きしていたからかもしれないが，カーンをウィニコット著作管理から外すことにした。カーンは偽りとはいえ，イギリスで作り上げた自己の中核から疎外された。ここでの喪失は決定的だったろう。

ここにはイギリスを理想化して母国語ではない精神分析の問題があるのだろう。精神分析は母国語でのみ可能ではないだろうか，最近，私はそう感じ始めている。残念なことに，カーンの精神分析にはその場，母なる大地は，47 年以後分断され，失われてしまっていた。イギリス人カーンには精神分析は偽りのつぎはぎの自己であったのだろう。戻る場所，パキスタンはその後も混乱を繰り返している（バングラディッシュの飢餓問題は記憶に新しい）。仕方なくイギリスという仮の家に居続けた彼は，漱石（あるいは土居）とは違う倒錯的な関係を社交的な世界で英国と持ち続けた。彼はイギリス的な対象として精神分析を使い続けたが，それはパキスタン的な感覚であったのかもしれない。英国は長く植民地問題があり，留学生を多く受け入れて，本国に戻して覇権を確保しその国を統治するシステムを長くもってきた。ウィニコットと違って，カーンの母国語は英語ではないが，イギリス以外でイギリス人カーンは精神分析をし続ける，戻る場所を持っていなかった。

1971 年にカーンの若い母親が死に，同時期にウィニコットが死ぬ。それはほぼ数か月の間に起きた。1976 年の告発の意味は，ウィニコットの死と連続して読むなら，もともと父親の死から起きたカーンの精神分析人生が，ウィニコット＝母親の対象喪失によって，最終的には訓練分析家の剥奪とエディターの失職という結果をもたらした。父親としての精神分析と母親としてのウィニコットは，英国のものであるがゆえに，パキスタンの地から分断されていて，不在の憎しみの対象としてあり続ける。そして今や IPA の決定に従って，カーンもヨーロッパから削除されようとしている。

ゴッドレイの「救い出す」という意味（2001）は，英国協会との関係で読み取れる。すなわち，精神分析の正史を紡ぐ立場にある英国協会からすれば，ウィニコットとカーンの共謀を指摘しており，ゴッドレイは，患者やクーパーたちと同じように，その文脈から切り離そうとしているのである。だがカーンから見れば，失われた植民地についてのイギリス人の妄想でしかないのだろう。遠くの東洋から見れば，英国協会はカーンを除名して，なぜウィニコットを決して除名しないだろうという疑問が生じる。興味深いことは，カーンが植民地であったパキスタンの人として死んだ父親に対して，自分は占領側であるイギリス人になり，そしてイギリス社交界で著名になって，しかもそれらすべてに異議を申し

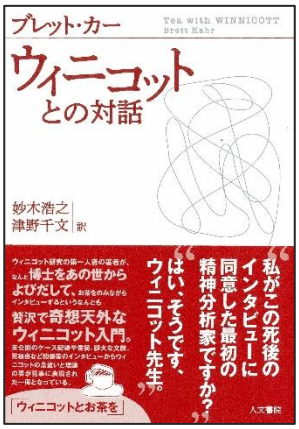
立てるように反倫理的な，反社会的な立場をとり続けたということである。それは父親の，そしてウィニコットの権威を傷つけ続けている。オリエンタリズム（サイード）から見れば，カーンの無意識の勝利である。私たち日本人はカーンの倫理違反を通して，ウィニコットの立場に疑問を持ち続けることができる，そうした特権的な場所にいるように思う。

晩年，ウィニコットはこの主張を「生き残る」と述べた。カーンを救い出すことはヨーロッパでは，もうできなくなっている。幸い，日本語で分析を受けて，日本語で理論を学ぶ私たちは，カーンも，そしてウィニコットも，同じように使用し続けることをできる。ウィニコットを日本語で発見すること，それは私たち自身が母国語との関わりをもう一度見直す作業になるだろう。私たちはウィニコットを通して，カーンを読み直す，あるいはカーンを通して，ウィニコットを見直すという興味深い作業を続けることができる。

参考文献

Cooper, J. (1993). Speak of Me as I am:The Life and Work of Masud Khan （Karnac),
Goldman, D. (2017). A Beholder's Share: Essays on Winnicott and the Psychoanalytic Imagination. New York: Routledge
Hopkins, L. (2006). False Self: The Life of Masud Khan (Other Press)
Kahr, B. (2010). 『ウィニコットとの対話』妙木浩之，津野千文訳，人文書院
Sandler, A-M. (2004). Institutional responses to boundary violations: The case of Masud Khan. with a commentary by Goodley, W. Int J Psychoanal 2004; 85:27–44
Willoughby, R. (2005). Masud Khan: The myth and the reality (Free Association Book)

書籍紹介



人文書院 HP
http://www.jimbunshoin.co.jp/book/b437900.html

ブレット・カー 著　妙木 浩之・津野 千文 訳
「ウィニコットとの対話」(2019，人文書院)

東京国際大学　妙木 浩之

本書は Bred Kahr (2016) *Tea with Winnicott.* London:Karnac の全訳である。本書は，亡くなった代表的な精神分析家との対話シリーズの一冊で，本書以外にも Bowlby などが出版されているが，どれもイラストとセットである。ウィニコットが登場する本書も，原書はイラストと一緒になっているが，紙面の都合で，本文のみの出版となった。まあ漫画のようなイラストも悪くないなあ，とは思ったし，本の題名も，もともとの味をだして，「ウィニコットとお茶を」でもいいかなあ，と思ったのだが，でもあえて本文のみの出版で，しかもウィニコットの対話本文のみでもという翻訳に踏み切ったのは，それだけ本書に価値があると思ったからである。

ウィニコット全集が 2016 年に刊行されて，私たちは彼の全仕事を時間軸で読み込むことができるようになった。実際ウィニコットは，今ブームだといっていい。例えば，ウィニコット論を集めた *The Winnicott Tradition: Lines of Development-Evolution of Theory and Practice over the Decades* (Psychology, Psychoanalysis & Psychotherapy) Routledge など，ウィニコット研究は，今日，精神分析の世界で新しい段階に入ったと思っている。彼を理解して，思想的に解読していく作業が，予想以上に多くの果実を生み出すことが見えてきたからである。思うに，この作業はフロイトと同じぐらいに重要なものではないか，そう思えるようになった。著者紹介のところにあるが，ブレット・カーは，ウィニコットの評伝を書いた人で，その後も多くの研究を重ねている。本書の後にも，ウィニコットの評伝を企画中らしい。今回の本の特徴は，ウィニコットを「生き返らせる」ために，イギリスと米国にあるケース記録など未公開の文献を読み直したのみならず，本書の最初に登場する，引退していた彼の元秘書を連絡しては見つけ出してインタビューを試みている。発見されたウィニコットの患者ピグルとの会話については IPA (国際精神分析協会誌) に掲載されたが，彼女を含めてカーは，ウィニコットを知る多くの人々との対話を重ねて，

ウィニコットを生き生きと復活させている，その産物が本書なのである。「生き残ること」はウィニコットのキーワードの一つだが，文字通り，本書の中でのウィニコットは生き返り，しかも実に生き生きと生きている。

もちろんウィニコット研究の成果には，光の部分もあれば，影の部分もある。彼が最初から小児科医であり，子供のために積極的に公的な場面に出て行って，児童の精神分析的なアプローチの可能性（毎日分析や多頻度の実践を当然とする精神分析から）を拡げたという革新的な側面は，おそらく光の部分。だが彼の優れた弟子であり，今では精神分析協会から除名されてしまったマシュード・カーンの出来事はウィニコットの影の部分である。本書に最初から，暗雲のように，話題の中に登場している。

ウィニコット全集の出版，その批判的な検討，さらには今後の精神分析の革新的な対話とともに，今後とも研究としていく作業が私たちに残されている。ウィニコットの重要性はますます増している。

本書の翻訳は，津野さんと私とで行った。津野さんが下訳を作り，私が対照させて読み，それをさらに話し合って，修正するという形で進行した。何度見直しても，いくつか訳に疑問は残ってしまうのが翻訳だが，それなりに分かりやすくしたつもりで，当時の英国の情報は，訳注に補足した。翻訳の復活から死後まで，人文書院の井上裕美さんにお付き合いいただいた。いつも面白い話とともに，楽しい翻訳作業であった。

ウィニコット・フォーラム 2019

「今、あらためてウィニコットを知る」

今年度よりウィニコット・フォーラムは，その 20 年の歴史を礎に『日本ウィニコット協会』へと生まれ変わります。

日本各地のウィニコット理論に関わる理論家・臨床家が集まり，ウィニコットについての新たな見方を展開していきたいと考えています。

記念すべき第 1 回大会は「今、あらためてウィニコットを知る」と題し，下記の要領で開催いたします。

当日は北山 修先生の記念講演，シンポジウム，事例検討会に加え，協会設立にかかわる総会も開催する予定です。

皆さまのご参加を，こころよりお待ちしております。

記

日時：2019 年 11 月 3 日（日・祝） 10:00~18:00 (9:30 受付開始)
会場：大阪大学中之島センター　10F 佐治敬三メモリアルホール
（大阪市北区中之島 4 丁目 3-53：大阪市立科学館北側）
定員：150 名
参加資格：守秘義務を遵守できる方
参加費：一般　¥9000／大学院生　¥6000
申込方法：電子メールにて件名を「ウィニコット・フォーラム参加希望」とし下記の①～⑥を本文に記載の上，【winnicottforum@gmail.com】にお送りください。

①氏名，②連絡先ご住所(郵便番号含む)，③連絡先電話番号，④メールアドレス，⑤勤務先および職種，⑥臨床心理士資格の有無

参加可能な方に受諾のご連絡と参加費の振込先をメールいたします。

※お問い合わせ，その他ご連絡は基本的にメールで行います
※臨床心理士資格更新ポイント取得申請予定です

共催：大阪対象関係論研究会，対象関係論勉強会，川谷医院

プログラム

10:00~10:10　開会の挨拶

館 直彦(たちメンタルクリニック／大阪市立大学大学院)

10:15~12:25　**シンポジウム「今，あらためてウィニコットを知る」**

「ウィニコットの臨床と夢」　吉村 聡 （上智大学）

「ウィニコットの失敗論」　恒吉 徹三（山口大学）

「テディベアは，移行対象ではない。」増尾 徳行（ひょうごこころの医療センター）

指定討論：工藤 晋平（名古屋大学）

司会：渡部 京太（広島市こども療育センター）

石田 拓也（奈良女子大学臨床心理相談センター）

12:30~13:00　総会

13:10~14:20　協会設立の交流会

14:30~15:50　**記念講演　「治療的退行論再考」北山 修（北山精神分析室）**

司会：館 直彦

16:00~18:00　**事例検討　「ウィニコットの症例「抱えることと解釈」を検討する」**

提供者：館 直彦

討論：川谷 大治（川谷医院）

妙木 浩之（東京国際大学）

横井 公一（微風会 浜寺病院）

司会：加茂 聡子（四谷こころのクリニック）

山崎 篤　（中村学園大学短期大学部）

※ 長らく絶版になっていた『抱えることと解釈』がこの機に再販される予定です！

ウィニコット・フォーラム 2019　抄録

シンポジウム

ウィニコットの臨床と夢

上智大学　吉村 聡

多くの精神分析家と同じく，Winnicott にとっても，夢 dreaming は重要な位置を占めている。それは，Winnicott が最初に触れた Freud の著書が『夢判断』であったことや，Klein からスーパービジョンを受け，さらに訓練分析家になった 1940 年頃にはクライン派の一人に数えられていたという点ばかりによるわけではない。

そもそも，Winnicott には「夢を思い出せない」という問題があったことは重要である。この問題に気づいた思春期の Winnicott は，徐々に精神分析に関心をもつようになった。つまり精神分析への入り口になったのが，自身の夢をめぐる問題なのである。ここには，夢を思い出せないというシゾイド様の症状形成とともに，医学教育を受けていた時期に第一次世界大戦を経験し，多くの知己を失ったという外傷体験も影響しているとも考えられる。これらの経験が，Winnicott の臨床と理論形成に大きな影響を与えたことは想像に難くない。

精神分析家になった Winnicott は，夢の解釈もさりながら，やがて夢を見ることと思い出すこと，そして夢を語ることの重要性を強調するようになった。ここに，夢と無意識に対する独自の臨床的な考えが集約されていると考えられるだろう。

今回，私が選んだテーマは，「Winnicott の臨床と夢」である。ウィニコット・フォーラムの設立にあたってテーマを考えたとき，Winnicott の原点にたちかえってみたいという思いが私の中にわきおこり，このテーマを選ばせていただいた。

当日は，Winnicott の夢に対する臨床的な考えが端的に示されているスクイグルゲームを中心に，Winnicott の臨床素材をひきながら，Winnicott 臨床における夢の意味について考えてみたい。キーワードは，夢を夢みること，そして夢みる場を提供し，夢見を促進するためのスクイグルゲームと精神分析である。

ウィニコット・フォーラム 2019　抄録

シンポジウム

ウィニコットの失敗論について

山口大学　恒吉 徹三

ウィニコットの発想が逆説的であることは失敗論にも生きている。面接者が失敗することの意義と必要性を説いた理論であり，臨床場面での困難な局面を面接者とクライアントが，意味あるものとしてともに取り扱うための枠組みだと考えられる。この発想の起源は発達的なものであり，100%の適応から始まる環境からの提供を，子どもが養育者の適応の失敗を使うことができる能力に応じて，徐々に減らしていくという過程によっていることをウィニコット（1967）は指摘している。子どもの能力に応じていない環境の失敗（environmental failure）は，結果として，高度に組織された防衛による症状を生み出すことを，5 歳の子どもとのスクィグル・ゲームを通してウィニコット（1965）は描き出している。

また，臨床的には，面接者がクライアントに適応する段階がまずあって，失敗はその後に生じる必要がある。ウィニコット（1955-56）の発想を要約すると，面接者の失敗により，「患者の過去が現在になっている」のであり「現在が過去へと遡って，現在が過去になっている」のであり，クライアントが過去の状況では抑えていた怒りを，面接者の失敗を使って怒ることができる機会を得ることができる，というモデルである。しかし，面接場面での失敗は，転移-逆転移の中での再演であり，一面では現実的な面接者の失敗でもあるため，面接上の困難な局面となる。この局面を，クライアントが怒りを正当なものとして表出する機会として提供できるか否かは，面接者が自らの失敗に対して，どのような対応をするかにかかっているといえる。

当日は，外傷体験のある成人の心理面接事例を提示し，面接者の失敗をクライアントがどのように使い，一方面接者はどのように自らの失敗に対応し，さらに逆転移を通してどのようにクライアント理解に至ったのかの経過を通して，ウィニコットの失敗論の理解を深めたい。（事例は日本心理臨床学会で発表したものである）

ウィニコット・フォーラム 2019　抄録

シンポジウム

テディベアは，移行対象ではない。

ひょうごこころの医療センター　増尾 徳行

Winnicott は経験という中間領域を指すのに,「移行対象」,「移行現象」という言い方を取り入れた。それはたとえば，親指とテディベア，両方の性質があると言う。彼の慧眼は，赤ん坊がさまざまに対象を取り扱う様子から，赤ん坊の経験という領野を見いだしたことにある。親指は自分 Me であり，テディベアは自分でないもの Not-Me なのだが，経験においては同じように扱われる。

それはなぜか。

赤ん坊はやがて，自分と自分でないものを区別するようになる。しかし移行現象においては，主観性，そして客観的に知覚されるもの両方の性質がある。テディベアは，客観的に知覚される対象である。一方経験には，主観と客観，両方の性質が寄与する。そして移行対象は，この経験という中間領域にある。それゆえテディベアそのものは，移行対象ではない。それをめぐる経験のなかに，移行対象はある。Winnicott は，この領域に特別な関心を寄せた。「私が指しているのは，小さな子どものテディベアや幼児が初めて握りこぶしを用いることそのものではない・・・。私は・・・中間領域に関心を持っている」。

ではこの領域の意義は何か。

中間領域における対象の性質について，主体のこころの状態と事物の性格との妥協形成物である，と Bollas は説明した。主体からは，抑圧されたもの，意識的・無意識的空想，内的現実などがかかわる。そして外的対象は，その事物の特徴が寄与する。これらから成る中間領域は，つぎのように言い換えうるだろう。赤ん坊はこの領域において，対象をめぐる身体感覚や空想，情緒を，経験にまとめあげている，と。

それゆえ私たちは,「これはあなたが思い描いたの?　それとも外から示されたの?」とは，赤ん坊に決して尋ねない。問いの持つ，対象の性質をどちらかに帰属させようとする圧力によって，中間領域は消え失せるからである。それは，経験の座である主体の存立を危うくする。ここは，私という存在 I-AM にかかる領域なのである。

ウィニコット・フォーラム 2019　抄録

記念講演

治療的退行論再考

北山精神分析室　北山 修

私が描き出したい「歌いながら考える」という状態は，これまでの精神分析理論では一体どういう形で描き出されてきたのだろう。まず浮かぶのは，自我心理学で言う「部分的退行」なのだが，そこで強調したいのはこの自己状態が全体的で総合的である点である。だから，これは D.W.ウィニコットの言う「遊ぶこと」や抱えられたところでの「true self（本当の自己）」に近いと思う。

そして認められねばならないのは，横臥の姿勢の分析で自然に起こるかもしれない，「退行しながら言語的に考える」という矛盾のアンサンブルは，自由連想法という精神分析本来の方法の目指すところであり，順調にゆくなら，自然に起こるはずの現象ということなのである。自由連想法の歴史は，フロイトがルートヴィヒ・ベルネという作家の随筆「三日間で独創的な作家になる方法」からヒントを得てこれを思いついたことから始まるのである（フロイト, 1920）。本は 13 歳の誕生日のプレゼントとして贈られたもののようであり，少年時代から後年に至るまで所有された唯一の本となったが，自由連想の発見につながっているという事実は忘れさられることになる。つまり，次々と思いついたことを書いて，さらに考えて推敲していくという方法は，独創的な作家の方法であって，同時に精神分析の仕事であることもまた，本来的なことなのだ。問題は，芸術家の方法から学んだことを数十年も彼が忘れていたというところにあり，このことが書かれにくいという，よくある私たちのアンビバレンスの根深さを見るのである。

「ルートヴィヒ・ベルネの影響は，フロイトの自己分析の形式そのものにまで及んでいる。彼は自己分析を主に書くことによって実践したのだが，そのことは，まったく評価されてこなかった－－－彼の自己分析とは，文字通り書くことによる治癒（writing cure）だった」（P.マホーニィ）。

ウィニコット・フォーラム 2019　抄録

事例検討

ウィニコットの症例「抱えることと解釈」を検討する

たちメンタルクリニック／大阪市立大学　館 直彦

『抱えることと解釈』は，ウィニコットが 1955 年に行った精神分析の断片を，最晩年に発表したものを，その後，一冊の本としてまとめたものである。その発表の経緯から考えて，ここにはウィニコットの精神分析臨床のエッセンスが盛り込まれていると考えてよいと思う。しかし，さまざまな理由から，本書は読みこなすことが難しく，その結果，その内容がこれまで十分に紹介されてこなかった。今回の事例検討では，このウィニコットの症例を館が要約して発表し，ウィニコット研究の大御所である川谷大治先生，妙木浩之先生，横井公一先生にそれぞれの観点からディスカッションしていただき，この症例を通して，ウィニコットの臨床についての，私たちの理解を深めたいと思っている。

協会からのお知らせ

日本ウィニコット協会を設立するにあたり，当協会の HP を開設いたしました。当協会のご紹介や，当協会への入会案内，ウィニコット・フォーラムの開催要項などを掲載しています。また，会員向けの専用ページでは，News1etter のバックナンバー，ウィニコットに関連する文献リストを掲載する予定です。
HP: https://www.winnicottforum.com

理事会

会長：館 直彦
副会長：妙木浩之
運営委員：生地 新，大矢泰士，加茂聡子，川谷大治，工藤晋平，島村三重子，
館 直彦（会長），恒吉徹三，中村留貴子，深津千賀子，藤山直樹，増尾徳行，
妙木浩之（副会長，編集委員長），山崎 篤，横井公一，吉村 聡，渡部京太
顧問：北山 修，松木邦裕，Jan Abram，Patrick Casement，Rudi Vermote，
Christpher Bollas
編集委員長：妙木浩之

2019 年 10 月 12 日発行
日本ウィニコット協会　Newsletter vol.1

編集：日本ウィニコット協会　Newsletter 編集委員会
編集委員長　妙木 浩之
発行：日本ウィニコット協会

E-mail: jwasecretariat@gmail.com
HP: https://www.winnicottforum.com